



Red Hat Fuse 7.8

Fuse の管理

Fuse Console を使用した Fuse アプリケーションの管理

Red Hat Fuse 7.8 Fuse の管理

Fuse Console を使用した Fuse アプリケーションの管理

法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

Fuse アプリケーションをデプロイするときに Fuse Console を使用すると Red Hat Fuse インテグレーションを監視し、対話することができます。

目次

はじめに	4
第1章 OPENSIFT における RED HAT FUSE アプリケーションの監視および管理	5
1.1. FUSE CONSOLE	5
1.2. OPENSIFT 4.X での FUSE CONSOLE の設定	5
1.3. OPENSIFT 3.11 での FUSE CONSOLE の設定	16
1.4. コンテナおよびアプリケーションの表示	20
1.5. APACHE CAMEL アプリケーションの表示および管理	21
1.6. AMQ ブローカーの表示	24
1.7. JMX ドメインおよび MBEAN の表示および管理	25
1.8. 診断の表示	25
1.9. スレッドの表示	26
1.10. FUSE CONSOLE でデータが正しく表示されるよう確認	26
第2章 SPRING BOOT スタンドアロンでの RED HAT FUSE アプリケーションの監視および管理	27
2.1. FUSE CONSOLE	27
2.2. SPRING BOOT 2.X の FUSE CONSOLE へのアクセス	27
2.3. FUSE CONSOLE ブランディングのカスタマイズ	29
2.4. FUSE CONSOLE のセキュア化	30
2.5. FUSE CONSOLE でデータが正しく表示されるよう確認	31
2.6. リモート FUSE アプリケーションへの接続	31
2.7. APACHE CAMEL アプリケーションの表示および管理	33
2.8. JMX ドメインおよび MBEAN の表示および管理	36
2.9. 診断の表示	37
2.10. スレッドの表示	37
第3章 KARAF スタンドアロンでの RED HAT FUSE アプリケーションの監視および管理	39
3.1. FUSE CONSOLE	39
3.2. FUSE CONSOLE へのアクセス	39
3.3. FUSE CONSOLE のセキュア化	39
3.4. ロールベースのアクセス参照	41
3.5. FUSE CONSOLE ブランディングのカスタマイズ	43
3.6. FUSE CONSOLE でデータが正しく表示されるよう確認	44
3.7. FUSE CONSOLE の無効化	45
3.8. リモート FUSE アプリケーションへの接続	45
3.9. APACHE CAMEL アプリケーションの表示および管理	48
3.10. JMX ドメインおよび MBEAN の表示および管理	51
3.11. OSGI 環境の表示および管理	52
3.12. 診断の表示	53
3.13. スレッドの表示	53
3.14. ログエントリーの表示	54
3.15. PROMETHEUS メトリックの有効化	54
第4章 EAP スタンドアロンでの RED HAT FUSE アプリケーションの監視および管理	57
4.1. FUSE CONSOLE	57
4.2. FUSE CONSOLE へのアクセス	57
4.3. FUSE CONSOLE ブランディングのカスタマイズ	58
4.4. FUSE CONSOLE のセキュア化	59
4.5. FUSE CONSOLE でデータが正しく表示されるよう確認	60
4.6. FUSE CONSOLE の無効化	60
4.7. リモート FUSE アプリケーションへの接続	61
4.8. APACHE CAMEL アプリケーションの表示および管理	64

4.9. JMX ドメインおよび MBEAN の表示および管理	67
4.10. 診断の表示	68
4.11. スレッドの表示	68
4.12. ログエントリーの表示	69
付録A FUSE CONSOLE 設定プロパティ	70

はじめに

Red Hat Fuse は、Fuse インテグレーションを表示および管理する、以下の 2 つのエンタープライズ管理ツールを提供します。

- Fuse Console は、ブラウザからアクセスする Web ベースのコンソールで、実行中の Fuse コンテナを監視および管理します。Fuse Console は Hawtio オープンソースソフトウェア (<https://hawtio.io/>) をベースにしています。このガイドでは Fuse Console の使用方法を説明しません。
- Prometheus は、Fuse ディストリビューションのシステムおよびインテグレーションレベルのメトリックを保存します。Grafana などのグラフィカル分析インターフェイスを使用して、保存された履歴データを表示および分析できます。Prometheus の使用に関する詳細は、以下のドキュメントを参照してください。
 - [Prometheus ドキュメント](#)
 - [Fuse on OpenShift ガイド](#)
 - [OpenShift Container Platform での Fuse Online のインストールと操作](#)

本ガイドの対象読者は Red Hat Fuse の管理者です。本ガイドの読者は、Red Hat Fuse プラットフォーム、Apache Camel、および所属組織の処理要件をよく理解していることを前提としています。

第1章 OPENSIFT における RED HAT FUSE アプリケーションの監視および管理

1.1. FUSE CONSOLE

Red Hat Fuse Console は、Hawtio オープンソースソフトウェアをベースとする Web コンソールです。サポートされるブラウザのリストは [Red Hat Fuse でサポートされる構成](#) を参照してください。

Fuse Console は、デプロイされた1つ以上の Fuse コンテナの詳細を確認および管理するための中央インターフェイスを提供します。また、Red Hat Fuse およびシステムリソースの監視、更新の実行、およびサービスの起動と停止を行うこともできます。

Fuse Console は、Red Hat Fuse スタンドアロンをインストールするか、Fuse on OpenShift を使用する場合に利用できます。Fuse Console で表示および管理できるインテグレーションは、実行されているプラグインによって異なります。使用できるプラグインには以下が含まれます。

- Camel
- JMX
- OSGI
- Runtime
- Logs

1.2. OPENSIFT 4.X での FUSE CONSOLE の設定

OpenShift 4.x では、Fuse Console の設定に、セキュリティーのセキュア化、インストール、およびデプロイが必要になります。Fuse Console のインストールおよびデプロイには、以下のオプションがあります。

- [「OperatorHub を使用した OpenShift 4.x での Fuse Console のインストールおよびデプロイ」](#)
特定の namespace で Fuse アプリケーションにアクセスするために、Fuse Console Operator を使用して Fuse Console をインストールおよびデプロイします。
- [「コマンドラインを使用した OpenShift 4.x での Fuse Console のインストールおよびデプロイ」](#)
OpenShift クラスターの複数の namespace または特定の namespace にある Fuse アプリケーションにアクセスするために、コマンドラインと Fuse Console テンプレートの1つを使用して Fuse Console をインストールおよびデプロイします。

必要に応じて、[「OpenShift 4.x 上の Fuse Console のロールベースアクセス制御」](#) の説明通りに、Fuse Console のロールベースアクセス制御 (RBAC) を実装することができます。

1.2.1. OperatorHub を使用した OpenShift 4.x での Fuse Console のインストールおよびデプロイ

OpenShift 4.x に Fuse Console をインストールするには、OpenShift OperatorHub で提供される Fuse Console Operator を使用します。Fuse Console をデプロイするには、インストールされた Operator のインスタンスを作成します。

前提条件

Fuse Console のロールベースアクセス制御 (RBAC) をカスタマイズする場合は、Fuse Console Operator のインストール先と同じ OpenShift namespace に RBAC 設定マップファイルが必要になります。OpenShift 4.x の [Fuse Console のロールベースアクセス制御](#) の説明にしたがって、デフォルトの RBAC 動作を使用する場合は、設定マップファイルを指定する必要はありません。

手順

Fuse Console をインストールおよびデプロイするには、以下を行います。

1. Web ブラウザーで、**cluster admin** 権限を持つユーザーとして OpenShift コンソールにログインします。
2. **Operators** をクリックした後、**OperatorHub** をクリックします。
3. 検索フィールドウィンドウに **Fuse Console** と入力し、Operator のリストを絞り込みます。
4. **Fuse Console Operator** をクリックします。
5. Fuse Console Operator インストールウィンドウで **Install** をクリックします。**Create Operator Subscription** フォームが表示されます。
 - **Update Channel** には、**fuse-console-7.8.x** を選択します。
 - **Installation Mode** では、デフォルト (クラスターの特定の namespace) を受け入れます。operator のインストール後に Fuse Console をデプロイする場合、クラスター上のすべての namespace でアプリケーションを監視するか、Fuse Console operator がインストールされた namespace のみでアプリケーションを監視するかを選択できる点に注意してください。
 - **Installed Namespace** には、Fuse Console Operator をインストールする namespace を選択します。
 - **Approval Strategy** では、**Automatic** または **Manual** を選択し、Fuse Console の更新が OpenShift によってどのように対処されるかを設定します。
 - **Automatic** (自動) 更新を選択した場合、新しいバージョンの Fuse Console Operator が使用できるようになると、人的な介入なしで OpenShift Operator Lifecycle Manager (OLM) によって、Fuse Console の稼働中のインスタンスが自動的にアップグレードされます。
 - **Manual** (手動) 更新を選択した場合、Operator の新しいバージョンが使用できるようになると、OLM によって更新リクエストが作成されます。クラスター管理者は、更新リクエストを手動で承認して、Fuse Console Operator を新しいバージョンに更新する必要があります。
6. **Install** をクリックします。

OpenShift によって、Fuse Console Operator が現在の namespace にインストールされます。
7. インストールを確認するには、**Operators** をクリックした後、**Installed Operators** をクリックします。Operator のリストに Fuse Console が表示されます。
8. OpenShift Web コンソールで Fuse Console をデプロイするには、以下を行います。
 - a. **Installed Operators** のリストで、**Name** 列の **Fuse Console** をクリックします。
 - b. **Provided APIs** の **Operator Details** ページで、**Create Instance** をクリックします。設定のデフォルト値を使用するか、任意でデフォルト値を編集します。

Fuse Console のパフォーマンスを向上する必要がある場合 (高可用性環境など)、Replicas で Fuse Console に割り当てられた Pod 数を増やすことができます。

Rbac (ロールベースアクセス制御) の場合、Fuse Console の RBAC を有効にするには、Form ビューで **rbac > Enabled** オプションを **true** に設定します。または、YAML ビューでファイルを編集して、spec 下に以下のエントリが含まれるようにします。

```
rbac:
  enabled: true
```

デフォルトの RBAC 動作をカスタマイズする場合や、Fuse Console Operator をインストールした namespace に ConfigMap ファイルがすでに存在する場合にのみ、**config Map** フィールドに値を指定します。RBAC の詳細は、[OpenShift 4.x 上の Fuse Console のロールベースアクセス制御](#) を参照してください。

- c. **Create** をクリックします。
Fuse Console Operator Details ページが開き、デプロイメントの状態が表示されます。

9. Fuse Console を開くには以下を行います。

- a. **namespace** デプロイメントの場合: OpenShift Web コンソールで、Fuse Console の operator をインストールしたプロジェクトを開き、**Overview** を選択します。**Project Overview** ページで **Launcher** セクションまで下方向にスクロールし、Fuse Console の URL をクリックして開きます。
cluster デプロイメントでは、OpenShift Web コンソールのタイトルバーで、グリッドアイコン () をクリックします。ポップアップメニューの **Red Hat アプリケーション** の下にある、Fuse Console の URL リンクをクリックします。
- b. Fuse Console にログインします。
ブラウザーに **Authorize Access** ページが表示され、必要なパーミッションが表示されます。
- c. **Allow selected permissions** をクリックします。
Fuse Console がブラウザーで開き、アクセス権限のある Fuse アプリケーション Pod が表示されます。

10. 表示するアプリケーションの **Connect** をクリックします。
新しいブラウザーウィンドウが開かれ、Fuse Console にアプリケーションが表示されます。

1.2.2. コマンドラインを使用した OpenShift 4.x での Fuse Console のインストールおよびデプロイ

OpenShift 4.x では、次のデプロイメントオプションの1つを選択して、コマンドラインから Fuse Console をインストールおよびデプロイできます。

- **cluster** - Fuse Console は、OpenShift クラスターで複数の namespace (プロジェクト) 全体にデプロイされた Fuse アプリケーションを検索し、接続することができます。このテンプレートをデプロイするには、OpenShift クラスターの管理者ロールが必要です。
- **ロールベースアクセス制御のあるクラスター** - 設定可能なロールベースアクセス制御 (RBAC) のあるクラスターテンプレート。詳細は、[OpenShift 4.x 上の Fuse Console のロールベースアクセス制御](#) を参照してください。

- **namespace** - Fuse Console は特定の OpenShift プロジェクト (namespace) にアクセスできません。このテンプレートをデプロイするには、OpenShift プロジェクトの管理者ロールが必要です。
- **ロールベースアクセス制御のある namespace** - 設定可能な RBAC のある namespace テンプレート。詳細は、[OpenShift 4.x 上の Fuse Console のロールベースアクセス制御](#) を参照してください。

Fuse Console テンプレートのパラメーターリストを表示するには、以下の OpenShift コマンドを実行します。

```
oc process --parameters -f https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/application-templates-2.1.0.fuse-sb2-780019-redhat-00005/fuse-console-namespace-os4.json
```

前提条件

- Fuse Console をインストールおよびデプロイする前に、[OpenShift 4.x で Fuse Console をセキュア化するための証明書の生成](#)の説明どおりに、サービス署名認証局で署名されたクライアント証明書を生成する必要があります。
- OpenShift クラスターの **cluster admin** ロールが必要です。
- [OpenShift 4.x サーバーでの Fuse イメージストリームおよびテンプレートのインストール](#)の説明どおりに、Fuse Console イメージストリーム (およびその他の Fuse イメージストリーム) がインストールされている必要があります。

手順

1. 以下のコマンドを実行してすべてのテンプレートのリストを取得し、Fuse Console イメージストリームがインストールされていることを確認します。

```
oc get template -n openshift
```

2. 任意で、すでにインストールされているイメージストリームを新しいリリースタグで更新する場合は、以下のコマンドを使用して **openshift** namespace に Fuse Console イメージをインポートします。

```
oc import-image fuse7/fuse7-console:1.8 --from=registry.redhat.io/fuse7/fuse-console:1.8 --confirm -n openshift
```

3. 以下のコマンドを実行して、Fuse Console の **APP_NAME** の値を取得します。

```
oc process --parameters -f TEMPLATE-FILENAME
```

ここで、**TEMPLATE-FILENAME** は以下のテンプレートのいずれかになります。

- クラスターテンプレート:
<https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/application-templates-2.1.0.fuse-sb2-780019-redhat-00005/fuse-console-cluster-os4.json>
- 設定可能な RBAC のあるクラスターテンプレート:
<https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/application-templates-2.1.0.fuse-sb2-780019-redhat-00005/fuse-console-cluster-rbac.yml>

- namespace テンプレート:
<https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/application-templates-2.1.0.fuse-sb2-780019-redhat-00005/fuse-console-namespace-os4.json>
- 設定可能な RBAC のある namespace テンプレート:
<https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/application-templates-2.1.0.fuse-sb2-780019-redhat-00005/fuse-console-namespace-rbac.yml>

たとえば、設定可能な RBAC のあるクラスターテンプレートの場合は、以下のコマンドを実行します。

```
oc process --parameters -f https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/application-templates-2.1.0.fuse-sb2-780019-redhat-00005/fuse-console-cluster-rbac.yml
```

4. 以下のコマンドを使用して、[OpenShift 4.x で Fuse Console をセキュア化するための証明書の生成](#) で生成した証明書からシークレットを作成し、Fuse Console にマウントします。コマンドの **APP_NAME** は、Fuse Console アプリケーションの名前に置き換えます。

```
oc create secret tls APP_NAME-tls-proxying --cert server.crt --key server.key
```

5. 以下のコマンドを実行して、ローカルにコピーされた Fuse Console テンプレートをベースとした新しいアプリケーションを作成します。コマンドの **myproject** は OpenShift プロジェクトの名前、**mytemp** は Fuse Console テンプレートが含まれるローカルディレクトリーへのパス、**myhost** は Fuse Console にアクセスするホストの名前に置き換えます。

- クラスターテンプレートの場合:

```
oc new-app -n myproject -f {templates-base-url}/fuse-console-cluster-os4.json -p ROUTE_HOSTNAME=myhost"
```

- RBAC テンプレートのあるクラスターの場合:

```
oc new-app -n myproject -f {templates-base-url}/fuse-console-cluster-rbac.yml -p ROUTE_HOSTNAME=myhost"
```

- namespace テンプレートの場合:

```
{templates-base-url}/fuse-console-namespace-os4.json
```

- RBAC テンプレートのある namespace の場合:

```
oc new-app -n myproject -f {templates-base-url}/fuse-console-namespace-rbac.yml
```

6. OpenShift Web コンソールを開くように Fuse Console を設定するには、以下のコマンドを実行して **OPENSIFT_WEB_CONSOLE_URL** 環境変数を設定します。

```
oc set env dc/${APP_NAME} OPENSIFT_WEB_CONSOLE_URL=`oc get -n openshift-config-managed cm console-public -o jsonpath={.data.consoleURL}`
```

7. 以下のコマンドを実行して、Fuse Console デプロイメントの状態と URL を取得します。

```
oc status
```

8. ブラウザーから Fuse Console にアクセスするには、手順 7. で返される URL (例: <https://fuse-console.192.168.64.12.nip.io>) を使用します。

1.2.2.1. OpenShift 4.x で Fuse Console をセキュア化するための証明書の生成

OpenShift 4.x で、Fuse Console プロキシと Jolokia エージェントとの間の接続をセキュアにするには、Fuse Console をデプロイする前にクライアント証明書を生成する必要があります。サービス署名認証局の秘密鍵を使用して、クライアント証明書を署名する必要があります。

この手順は、コマンドラインを使用して Fuse Console をインストールおよびデプロイしている場合にのみ実行する必要があります。Fuse Console Operator を使用している場合は、Fuse Console Operator がこのタスクを処理します。



重要

各 OpenShift クラスターに別のクライアント証明書を生成し、署名する必要があります。複数のクラスターに同じ証明書を使用しないでください。

前提条件

- OpenShift クラスターにアクセス可能な **cluster admin** 権限がある。
- 複数の OpenShift クラスターの証明書を生成し、現在のディレクトリーに別のクラスターの証明書を生成している場合は、以下のいずれかを実行して、現在のクラスターに別の証明書を生成するようにします。
 - 現在のディレクトリーから既存の証明書ファイル (**ca.crt**、**ca.key**、および **ca.srl**) を削除します。
 - 別の作業ディレクトリーに移動します。たとえば、現在の作業ディレクトリーの名前が **cluster1** の場合、新しい **cluster2** ディレクトリーを作成し、作業ディレクトリーをそのディレクトリーに変更します。

```
mkdir ../cluster2
```

```
cd ../cluster2
```

手順

1. cluster admin 権限を持つユーザーとして OpenShift にログインします。

```
oc login -u <user_with_cluster_admin_role>
```

2. 以下のコマンドを実行して、サービス署名認証局のキーを取得します。

- 以下を実行して、証明書を取得します。

```
oc get secrets/signing-key -n openshift-service-ca -o "jsonpath={.data['tls.crt']}" | base64 --decode > ca.crt
```

- 以下を実行して、秘密鍵を取得します。

```
oc get secrets/signing-key -n openshift-service-ca -o "jsonpath={.data['tls.key']}" | base64 --decode > ca.key
```

3. [Kubernetes certificates administration](#) の説明にしたがって、**easysrsa**、**openssl**、または **cfssl** を使用して、クライアント証明書を作成します。
以下に、openssl を使用したコマンドの例を示します。

- a. 秘密鍵を作成します。

```
openssl genrsa -out server.key 2048
```

- b. CSR 設定ファイルを作成します。

```
cat <<EOT >> csr.conf
[ req ]
default_bits = 2048
prompt = no
default_md = sha256
distinguished_name = dn

[ dn ]
CN = fuse-console.fuse.svc

[ v3_ext ]
authorityKeyIdentifier=keyid,issuer:always
keyUsage=keyEncipherment,dataEncipherment,digitalSignature
extendedKeyUsage=serverAuth,clientAuth
EOT
```

ここでは、**CN** パラメーターの値はアプリケーション名とアプリケーションが使用する namespace を参照します。

- c. CSR を作成します。

```
openssl req -new -key server.key -out server.csr -config csr.conf
```

- d. 署名済みの証明書を発行します。

```
openssl x509 -req -in server.csr -CA ca.crt -CAkey ca.key -CAcreateserial -out server.crt
-days 10000 -extensions v3_ext -extfile csr.conf
```

次のステップ

コマンドラインを使用した [OpenShift 4.x での Fuse Console のインストールおよびデプロイ](#) で説明されているように、Fuse Console のシークレットを作成するには、この証明書が必要です。

1.2.3. OpenShift 4.x 上の Fuse Console のロールベースアクセス制御

Fuse Console は、OpenShift によって提供されるユーザー承認に応じてアクセスを推測する、ロールベースアクセス制御 (RBAC) を提供します。Fuse Console では、RBAC はユーザーが Pod で MBean 操作を実行できるかどうかを判断します。

OpenShift の承認に関する詳細は、OpenShift ドキュメントの [RBAC の使用によるパーミッションの定義および適用](#) を参照してください。

Operator を使用して OpenShift に Fuse Console をインストールした場合、ロールベースのアクセスはデフォルトで無効になります。[OperatorHub を使用した OpenShift 4.x での Fuse Console のインストールおよびデプロイ](#) にあるように、任意でインストール中またはインストール後に Operator で

RBAC を有効にできます。

Fuse Console のロールベースアクセスを実装する場合は、RBAC で設定可能なテンプレートの1つ (**fuse-console-cluster-rbac.yml** または **fuse-console-namespace-rbac.yml**) を使用して、[コマンドラインを使用した OpenShift 4.x での Fuse Console のインストールおよびデプロイ](#) の説明どおりに Fuse Console をインストールする必要があります。

Fuse Console RBAC は、OpenShift の Pod リソースでユーザーの **verb (動詞)** アクセスを利用して、Fuse Console の Pod の MBean 操作にユーザーがアクセスできるかどうかを判断します。デフォルトでは、Fuse Console には2つのユーザーロールがあります。

- **admin**
ユーザーが OpenShift で Pod を **更新** できる場合、ユーザーには Fuse Console の **admin** ロールが付与されます。ユーザーは、Fuse Console で、その Pod に対して **書き込み** の MBean 操作を実行できます。
- **viewer**
ユーザーが OpenShift で Pod を **取得** できる場合、ユーザーには Fuse Console の **viewer** ロールが付与されます。ユーザーは、Fuse Console で、その Pod に対して **読み取り専用** の MBean 操作を実行できます。



注記

Fuse Console Operator 設定で RBAC を有効にしない場合や、RBAC テンプレートを使用して Fuse Console をインストールしない場合、Pod リソースで **update** verb (動詞) が付与された OpenShift ユーザーのみが Fuse Console の MBeans 操作の実行が許可されます。Pod リソースで **get** verb (動詞) を付与されたユーザーは、Pod を **表示** できますが、Fuse Console の操作は実行できません。

関連情報

- [OpenShift 4.x での Fuse Console のアクセスロールの判断](#)
- [OpenShift 4.x での Fuse Console へのロールベースアクセスのカスタマイズ](#)
- [OpenShift 4.x での Fuse Console のロールベースアクセス制御の無効化](#)

1.2.3.1. OpenShift 4.x での Fuse Console のアクセスロールの判断

Fuse Console のロールベースアクセス制御は、Pod に対するユーザーの OpenShift パーミッションから推測されます。特定のユーザーに付与された Fuse Console のアクセスロールを判断するには、Pod に対してユーザーに付与された OpenShift パーミッションを取得します。

前提条件

- ユーザーの名前を知っている必要があります。
- Pod の名前を知っている必要があります。

手順

- ユーザーが Pod に対して Fuse Console の admin ロールを持っているかどうかを確認するには、以下のコマンドを実行してユーザーが OpenShift で Pod を更新できるかどうかを確認します。

```
oc auth can-i update pods/<pod> --as <user>
```

応答が **yes** の場合、ユーザーはその Pod に対して Fuse Console の **admin** ロールを持っています。ユーザーは、Fuse Console で、その Pod に対して **書き込み** の MBean 操作を実行できません。

- ユーザーが Pod に対して Fuse Console の **viewer** ロールを持っているかどうかを確認するには、以下のコマンドを実行してユーザーが OpenShift で Pod を **取得** できるかどうかを確認します。

```
oc auth can-i get pods/<pod> --as <user>
```

応答が **yes** の場合、ユーザーはその Pod に対して Fuse Console の **viewer** ロールを持っています。ユーザーは、Fuse Console で、その Pod に対して **読み取り専用** の MBean 操作を実行できます。コンテキストによっては、Fuse Console でオプションを無効にしたり、ユーザーによる **書き込み** MBean 操作の試行時に "operation not allowed for this user" メッセージを表示したりして、**viewer** ロールを持つユーザーによる **書き込み** MBean 操作が実行されないようにします。

応答が **no** の場合、ユーザーは Fuse Console のロールにバインドされず、ユーザーは Fuse Console で Pod を確認できません。

関連情報

- [OpenShift 4.x 上の Fuse Console のロールベースアクセス制御](#)
- [OpenShift 4.x での Fuse Console へのロールベースアクセスのカスタマイズ](#)
- [OpenShift 4.x での Fuse Console のロールベースアクセス制御の無効化](#)

1.2.3.2. OpenShift 4.x での Fuse Console へのロールベースアクセスのカスタマイズ

OperatorHub を使用して Fuse Console をインストールし、ロールベースアクセス制御 (RBAC) を有効にする場合、[OpenShift 4.x 上の Fuse Console のロールベースアクセス制御](#) の説明どおりに、Fuse Console Operator はデフォルトの RBAC 動作を提供します。Fuse Console の RBAC 動作をカスタマイズする場合、Fuse Console をデプロイする前に ConfigMap ファイル (カスタムの RBAC 動作を定義する) を指定する必要があります。カスタム ConfigMap ファイルは、Fuse Console Operator をインストールした namespace に配置する必要があります。

コマンドラインテンプレートを使用して Fuse Console をインストールする場合、**deployment-cluster-rbac.yml** および **deployment-namespace-rbac.yml** テンプレートによって、設定ファイル (**ACL.yml**) が含まれる ConfigMap が作成されます。設定ファイルでは、MBean 操作に許可されるロールが定義されます。

前提条件

- OperatorHub または Fuse Console の RBAC テンプレート (**deployment-cluster-rbac.yml** または **deployment-namespace-rbac.yml**) の1つを使用して、Fuse Console がインストール済みである必要があります。

手順

Fuse Console の RBAC ロールをカスタマイズする場合は、以下を行います。

1. コマンドラインを使用して Fuse Console をインストールした場合、インストールテンプレートにはデフォルトの ConfigMap ファイルが含まれるため、次のステップを省略できます。

OperatorHub を使用して Fuse Console をインストールした場合、Fuse Console をデプロイする前に RBAC ConfigMap を作成します。

- a. 現在の OpenShift プロジェクトが Fuse Console をインストールするプロジェクトであることを確認します。たとえば、Fuse Console を `fusetest` プロジェクトにインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
oc project fusetest
```

- b. テンプレートから Fuse Console RBAC ConfigMap ファイルを作成するには、以下のコマンドを実行します。

```
oc process -f https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/2.1.x.sb2.redhat-7-8-x/fuse-console-operator-rbac.yml -p APP_NAME=fuse-console | oc create -f -
```

2. 以下のコマンドを実行してエディターで ConfigMap を開きます。

```
oc edit cm $APP_NAME-rbac
```

以下に例を示します。

```
oc edit cm fuse-console-rbac
```

3. ファイルを編集します。
4. ファイルを保存して変更を適用します。Fuse Console の Pod は OpenShift によって自動的に再起動されます。

関連情報

- [OpenShift 4.x 上の Fuse Console のロールベースアクセス制御](#)
- [OpenShift 4.x での Fuse Console のアクセスロールの判断](#)
- [OpenShift 4.x での Fuse Console のロールベースアクセス制御の無効化](#)

1.2.3.3. OpenShift 4.x での Fuse Console のロールベースアクセス制御の無効化

Fuse Console の `HAWTIO_ONLINE_RBAC_ACL` 環境変数は、ロールベースアクセス制御 (RBAC) の ConfigMap 設定ファイルのパスを OpenShift サーバーに渡します。`HAWTIO_ONLINE_RBAC_ACL` 環境変数が指定されていない場合、RBAC のサポートは無効になり、Pod リソース (OpenShift の) で `update` verb (動詞) が付与されたユーザーのみが Fuse Console の Pod で MBean 操作を呼び出すことが承認されます。

Operator を使用して OpenShift に Fuse Console をインストールした場合、ロールベースのアクセスはデフォルトで無効になることに注意してください。

前提条件

Fuse Console がインストール済みである必要があります。

- OperatorHub を使用してインストールされ、Fuse Console 設定で RBAC が有効になっている。

- コマンドラインを使用してインストールされ、Fuse Console RBAC テンプレートの1つ (**deployment-cluster-rbac.yml** または **deployment-namespace-rbac.yml**) が指定されている。

手順

Fuse Console のロールベースのアクセスを無効にするには、以下を実行します。

1. OpenShift で、Fuse Console の **Deployment Config** リソースを編集します。
2. **HAWTIO_ONLINE_RBAC_ACL** 環境変数の定義をすべて削除します。
(値を消去するだけでは不十分です)。
3. ファイルを保存して変更を適用します。Fuse Console の Pod は OpenShift によって自動的に再起動されます。

関連情報

- [OpenShift 4.x 上の Fuse Console のロールベースアクセス制御](#)
- [OpenShift 4.x での Fuse Console のアクセスロールの判断](#)
- [OpenShift 4.x での Fuse Console へのロールベースアクセスのカスタマイズ](#)

1.2.4. OpenShift 4.x での Fuse Console のアップグレード

Red Hat OpenShift 4.x では、Red Hat Fuse Operator などの Operator の更新が処理されます。詳細は、[OpenShift ドキュメントの Operator](#) を参照してください。

その後、アプリケーションの設定方法によっては、Operator の更新でアプリケーションのアップグレードをトリガーできるようになります。

Fuse Console アプリケーションでは、アプリケーションカスタムリソース定義の **.spec.version** フィールドを編集して、アプリケーションのアップグレードをトリガーすることもできます。

前提条件

- OpenShift クラスターの管理者権限が必要です。

手順

Fuse Console アプリケーションをアップグレードするには、以下を行います。

1. ターミナルウィンドウで、以下のコマンドを使用してアプリケーションカスタムリソース定義の **.spec.version** フィールドを変更します。

```
oc patch <project-name> <custom-resource-name> --type='merge' -p '{"spec": {"version": "1.7.1"}}'
```

以下に例を示します。

```
oc patch myproject example-fuseconsole --type='merge' -p '{"spec":{"version": "1.7.1"}}'
```

2. アプリケーションの状態が更新されたことを確認します。

```
oc get myproject
```

応答には、バージョン番号などのアプリケーションに関する情報が表示されます。

```
NAME          AGE URL          IMAGE
example-fuseconsole 1m https://fuseconsole.192.168.64.38.nip.io
docker.io/fuseconsole/online:1.7.1
```

.spec.version フィールドの値を変更すると、OpenShift によってアプリケーションが自動的に再デプロイされます。

- バージョンの変更によってトリガーされた再デプロイの状態をチェックするには、以下を実行します。

```
oc rollout status deployment.v1.apps/example-fuseconsole
```

正常にデプロイされた場合は以下の応答が表示されます。

```
deployment "example-fuseconsole" successfully rolled out
```

1.3. OPENSIFT 3.11 での FUSE CONSOLE の設定

OpenShift 3.11 では、Fuse Console の設定方法は 2 つあります。

- プロジェクトで実行しているすべての Fuse コンテナを監視できるように **集約型** の Fuse Console カタログアイテムをプロジェクトに追加して設定します。
- 実行している 1 つの Fuse コンテナを監視できるように特定の Pod から設定します。

OpenShift Console またはコマンドラインから Fuse Console をデプロイできます。



注記

Minishift または CDK ベースの環境変数に Fuse Console をインストールするには、以下の KCS の記事で説明されている手順に従います。

- Minishift または CDK ベースの環境に Fuse Console をインストールするには、[KCS 4998441](#) を参照してください。
- Jolokia 認証を無効にする必要がある場合は、[KCS 3988671](#) で説明されている回避策を参照してください。

前提条件

- [Fuse on OpenShift ガイド](#) の説明にしたがって、Fuse Console の Fuse on OpenShift イメージストリームおよびテンプレートをインストールする必要があります。
- OpenShift 3.11 のクラスターモードでは、cluster admin ロールとクラスターモードテンプレートが必要です。以下のコマンドを実行します。

```
oc adm policy add-cluster-role-to-user cluster-admin system:serviceaccount:openshift-infra:template-instance-controller
```



注記

- クラスターモードテンプレートは、デフォルトでは OpenShift Container Platform の最新バージョンでのみ利用できます。OpenShift Online のデフォルトカタログでは提供されません。
- Fuse Console のテンプレートは、デフォルトでエンドツーエンド暗号化を設定するため、Fuse Console のリクエストはブラウザーからクラスター内のサービスまでエンドツーエンドでセキュア化されます。
- Fuse Console のユーザー管理は、OpenShift によって処理されます。
- ロールベースアクセス制御 (デプロイ後に Fuse Console にアクセスするユーザーの場合) は現在 Fuse on OpenShift では使用できません。

[「OpenShift 3.11 Console からの Fuse Console のデプロイ」](#)

[「OpenShift 3.11 の Fuse Console から単一の Fuse Pod を監視」](#)

[「コマンドラインからの Fuse Console のデプロイ」](#)

1.3.1. OpenShift 3.11 Console からの Fuse Console のデプロイ

OpenShift 3.11 Console から OpenShift クラスターで Fuse Console をデプロイするには、以下の手順にたがいます。

手順

1. OpenShift コンソールで既存のプロジェクトを開くか、新しいプロジェクトを作成します。
2. Fuse Console を OpenShift プロジェクトに追加します。
 - a. **Add to Project** → **Browse Catalog** と選択します。
Select an item to add to the current project ページが開きます。
 - b. **Search** フィールドで **Fuse Console** を入力します。
Red Hat Fuse 7.x Console および **Red Hat Fuse 7.x Console (cluster)** アイテムが検索結果として表示されるはずですが。



注記

Red Hat Fuse Console アイテムが検索結果として表示されない場合や、表示されるアイテムが最新バージョンでない場合は、[Fuse on OpenShift ガイド](#) の OpenShift サーバーの準備セクションにある説明にしたがって、Fuse Console テンプレートを手作業でインストールすることができます。

- a. **Red Hat Fuse Console** アイテムの1つをクリックします。
 - **Red Hat Fuse 7.x Console**- このバージョンの Fuse Console は、現在の OpenShift プロジェクトにデプロイされた Fuse アプリケーションを検出し、接続します。
 - **Red Hat Fuse 7.x Console (cluster)**- このバージョンの Fuse Console は、OpenShift クラスターの複数のプロジェクトにデプロイされた Fuse アプリケーションを検出し、接続します。

- b. **Red Hat Fuse Console** ウィザードで **Next** をクリックします。ウィザードの **Configuration** ページが開きます。
任意で、設定パラメーターのデフォルト値を変更できます。
 1. **Create** をクリックします。
ウィザードの **Results** ページに Red Hat Fuse Console が作成されたことが表示されます。
 2. **Continue to the project overview** をクリックし、Fuse Console アプリケーションがプロジェクトに追加されたことを確認します。
 3. Fuse Console を開き、提供された URL をクリックした後にログインします。
ブラウザーに **Authorize Access** ページが表示され、必要なパーミッションが表示されます。
 4. **Allow selected permissions** をクリックします。
ブラウザーで Fuse Console が開かれ、プロジェクトで実行されている Fuse の Pod が表示されます。
 5. 表示するアプリケーションの **Connect** をクリックします。
新しいブラウザーウィンドウが開かれ、Fuse Console にアプリケーションが表示されます。

1.3.2. OpenShift 3.11 の Fuse Console から単一の Fuse Pod を監視

OpenShift 3.11 で実行している Fuse Pod の Fuse Console を開きます。

1. OpenShift プロジェクトの **Applications → Pods** ビューで、Pod 名をクリックし、実行している Fuse Pod の詳細を表示します。このページの右側に、コンテナーテンプレートの概要が表示されます。

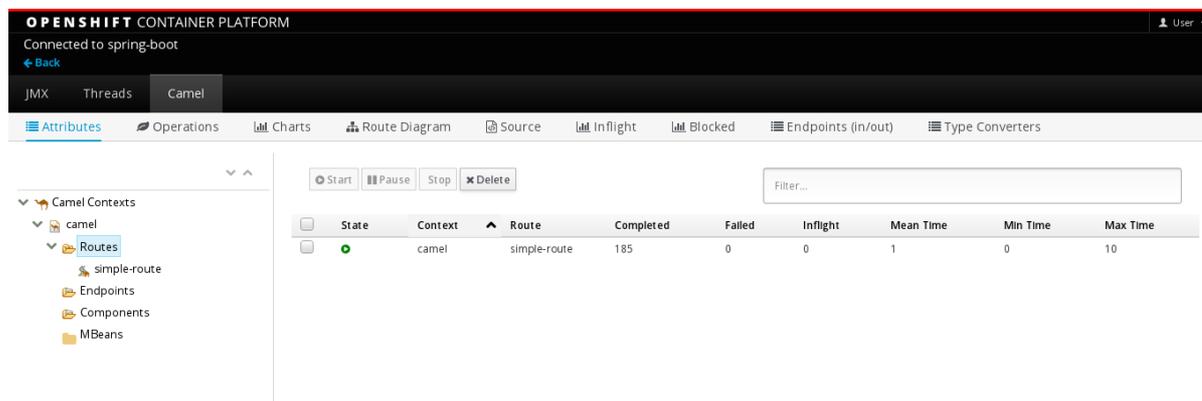
Template

Containers

CONTAINER: SPRING-BOOT

-  **Image:** [test/fuse70-spring-boot](#) eda527f 193.1 MiB
-  **Build:** [fuse70-spring-boot-s2i, #2](#)
-  **Source:** Binary
-  **Ports:** 8080/TCP (http), 8778/TCP (jolokia), 9779/TCP (prometheus)
-  **Mount:** default-token-p4zsn → /var/run/secrets/kubernetes.io/serviceaccount
read-only
-  **CPU:** 200 millicores to 1 core
-  **Readiness Probe:** GET /health on port 8081 (HTTP) 10s delay, 1s timeout
-  **Liveness Probe:** GET /health on port 8081 (HTTP) 180s delay, 1s timeout
-  [Open Java Console](#)

2. このビューの **Open Java Console** リンクをクリックし、Fuse Console を開きます。



注記

Pod ビューで Fuse Console へのリンクを表示するよう OpenShift を設定するには、Fuse on OpenShift イメージを実行している Pod が **jolokia** に設定された name 属性内で TCP ポートを宣言する必要があります。

```
{
  "kind": "Pod",
  [...]
  "spec": {
    "containers": [
      {
        [...]
        "ports": [
          {
            "name": "jolokia",
            "containerPort": 8778,
            "protocol": "TCP"
          }
        ]
      }
    ]
  }
}
```

1.3.3. コマンドラインからの Fuse Console のデプロイ

表1.1 「[Fuse Console テンプレート](#)」は、Fuse アプリケーションのデプロイメントのタイプに応じて、コマンドラインから Fuse Console をデプロイするために使用する OpenShift 3.1 テンプレートについて説明しています。

表1.1 Fuse Console テンプレート

タイプ	説明
fis-console-cluster-template.json	Fuse Console は、複数の namespace またはプロジェクトにまたがってデプロイされた Fuse アプリケーションを検出し、接続することができます。このテンプレートをデプロイするには、OpenShift の cluster-admin ロールが必要です。

タイプ	説明
fis-console-namespace-template.json	このテンプレートは、Fuse Console の現在の OpenShift プロジェクト (namespace) へのアクセスを制限するため、単一のテナントデプロイメントとして動作します。このテンプレートをデプロイするには、現在の OpenShift プロジェクトの admin ロールが必要です。

任意で以下のコマンドを実行すると、すべてのテンプレートのパラメーターのリストを表示できます。

```
oc process --parameters -f https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/application-templates-2.1.0.fuse-sb2-780019-redhat-00005/fis-console-namespace-template.json
```

手順

コマンドラインから Fuse Console をデプロイするには、以下を行います。

1. 以下のコマンドの1つを実行して、Fuse Console テンプレートをベースとした新しいアプリケーションを作成します。コマンドの **myproject** はプロジェクトの名前に置き換えます。

- Fuse Console の **cluster** テンプレートの場合は、以下ようになります。**myhost** は Fuse Console にアクセスするホストの名前になります。

```
oc new-app -n myproject -f https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/application-templates-2.1.0.fuse-sb2-780019-redhat-00005/fis-console-cluster-template.json -p ROUTE_HOSTNAME=myhost
```

- Fuse Console の **namespace** テンプレートの場合は以下ようになります。

```
oc new-app -n myproject -f https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/application-templates-2.1.0.fuse-sb2-780019-redhat-00005/fis-console-namespace-template.json
```



注記

namespace テンプレートの `route_hostname` パラメーターは OpenShift によって自動的に生成されるため、省略することが可能です。

2. 以下のコマンドを実行して、Fuse Console デプロイメントの状態と URL を取得します。

```
oc status
```

3. ブラウザーから Fuse Console にアクセスするには、提供される URL (例: <https://fuse-console.192.168.64.12.nip.io>) を使用します。

1.4. コンテナーおよびアプリケーションの表示

OpenShift の Fuse Console にログインすると、Fuse Console のホームページに利用可能なコンテナーが表示されます。

手順

- コンテナを管理 (作成、編集、または削除) するには、OpenShift コンソールを使用します。
- OpenShift クラスターで Fuse アプリケーションと AMQ ブローカー (該当する場合) を確認するには、**Online** タブをクリックします。

1.5. APACHE CAMEL アプリケーションの表示および管理

Fuse Console の **Camel** タブで Apache Camel のコンテキスト、ルート、および依存関係を表示および管理します。

次の詳細を表示できます。

- 実行中の Camel コンテキストすべてのリスト。
- Camel バージョン番号やランタイム統計など、各 Camel コンテキストの詳細情報。
- 各 Camel アプリケーションの全ルートおよびランタイム統計のリスト。
- 実行中のルートとリアルタイムのメトリクスのグラフィカル表示。

また、以下を行うと Camel アプリケーションと対話もできます。

- コンテキストの起動および一時停止。
- 再起動、停止、一時停止、再開などを実行できるように、すべての Camel アプリケーションとそれらのルートのライフサイクルを管理すること。
- 実行中のルートのライブトレースおよびデバッグ。
- Camel エンドポイントへのメッセージの閲覧および送信。

前提条件

Camel タブは、1つ以上の Camel ルートを使用するコンテナに接続する場合のみ使用できます。

1.5.1. コンテキストの起動、一時停止、または削除

1. Camel タブのツリービューで、**Camel Contexts** をクリックします。
2. リストのコンテキストの横にあるボックスにチェックマークを入れます。
3. **Start** または **Suspend** をクリックします。
4. コンテキストを削除するには以下を行います。
 - a. コンテキストを停止します。
 - b. 楕円のアイコンをクリックし、ドロップダウンメニューで **Delete** を選択します。



注記

コンテキストを削除する場合、デプロイされたアプリケーションから削除します。

1.5.2. Camel アプリケーションの詳細表示

1. **Camel** タブのツリービューで、Camel アプリケーションをクリックします。
2. アプリケーションの属性と値のリストを表示するには、**Attributes** をクリックします。
3. アプリケーション属性をグラフィカルに表示するには、**Chart** をクリックした後、**Edit** をクリックし、チャートに表示する属性を選択します。
4. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
5. アプリケーションエンドポイントを表示するには、**Endpoints** をクリックします。リストは **URL**、**Route ID**、および **direction** で絞り込むことができます。
6. メッセージ本文とメッセージヘッダーを別のタイプに変換するために使用される Camel 組み込みタイプ変換メカニズムに関連する統計を表示、有効化、および無効化するには、**Type Converters** をクリックします。
7. JMX 操作 (XML からのルート追加または更新、クラスパスで利用できる Camel コンポーネントの検索など) を表示および実行するには、**Operations** をクリックします。

1.5.3. Camel ルートリストの表示および Camel ルートとの対話

1. ルートのリストを表示するには、以下を行います。
 - a. **Camel** タブをクリックします。
 - b. ツリービューでアプリケーションの routes フォルダをクリックします。

Routes

Start Stop ⋮		
<input type="checkbox"/>	Name ^	State
<input type="checkbox"/>	_route1	Started
<input type="checkbox"/>	_route2	Started

2. 1つまたは複数のルートを起動、停止、または削除するには、以下を行います。
 - a. リストのルートの横にあるボックスにチェックマークを入れます。
 - b. **Start** または **Stop** をクリックします。
 - c. 最初にルートを停止してから削除する必要があります。停止したら楕円のアイコンをクリックし、ドロップダウンメニューで **Delete** を選択します。

Routes

Start Stop ⋮		
<input checked="" type="checkbox"/>	Name ^	Delete
<input checked="" type="checkbox"/>		



注記

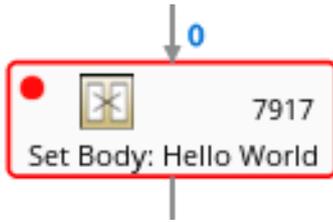
- ルートを削除する場合、デプロイされたアプリケーションから削除します。
- ツリービューで特定のルートを選択し、右上のメニューをクリックして起動、停止、または削除することもできます。

3. ルートのグラフィカルな図を表示するには、**Route Diagram** をクリックします。
4. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
5. エンドポイントを表示するには、**Endpoints** をクリックします。URL、Route ID、および方向でリストを絞り込むことができます。
6. **Type Converters** をクリックし、Camel の組み込みタイプ変換メカニズムに関連する統計を表示、有効化、および無効化します。このメカニズムはメッセージ本文とメッセージヘッダーを別のタイプに変換するために使用されます。
7. 特定のルートと対話するには、以下を行います。
 - a. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
 - b. ルート属性と値のリストを表示するには、**Attributes** をクリックします。
 - c. ルート属性をグラフィカルに表示するには、**Chart** をクリックします。**Edit** をクリックすると、チャートに表示する属性を選択できます。
 - d. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
 - e. **Operations** をクリックして JMX 操作 (ルートを XML としてダンプ、ルートの Camel ID 値の取得など) を表示および実行できます。
8. ルートを介してメッセージをトレースするには、以下を実行します。
 - a. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
 - b. **Trace** を選択し、**Start tracing** をクリックします。
9. メッセージをルートに送信するには、以下を行います。
 - a. **Camel** タブのツリービューでコンテキストのエンドポイントフォルダーを開き、エンドポイントを選択します。
 - b. **Send** サブタブをクリックします。
 - c. JSON または XML 形式のメッセージを設定します。
 - d. **Send** をクリックします。
 - e. ルートの **Trace** タブに戻り、ルートを介したメッセージのフローを確認します。

1.5.4. ルートのデバッグ

1. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。

2. **Debug** を選択し、**Start debugging** をクリックします。
3. ブレークポイントを追加するには、図のノードを選択し、**Add breakpoint** をクリックします。ノードに赤い点が表示されます。



ノードがブレークポイントのリストに追加されます。

Breakpoints	
setBody1	×
log1	×

4. 下矢印をクリックして次のノードに移動するか、**Play** ボタンをクリックしてルートの実行を再開します。
5. **Pause** ボタンをクリックして、ルートのすべてのスレッドを一時停止します。
6. 終了したら **Stop debugging** をクリックします。すべてのブレークポイントが消去されます。

1.6. AMQ ブローカーの表示

Fuse Console を設定して、OpenShift クラスタにデプロイされた AMQ ブローカーを表示できます。



重要

Fuse Console から AMQ ブローカーを表示することは、テクノロジープレビュー機能です。テクノロジープレビュー機能は、Red Hat の本番環境のサービスレベルアグリーメント (SLA) ではサポートされず、機能的に完全ではないことがあるため、Red Hat は本番環境での使用は推奨しません。Red Hat は、実稼働環境でこれらを使用することを推奨していません。テクノロジープレビューの機能は、最新の製品機能をいち早く提供して、開発段階で機能のテストを行いフィードバックを提供していただくことを目的としています。Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、<https://access.redhat.com/ja/support/offerings/techpreview> を参照してください。

前提条件

各 AMQ ブローカーイメージ (Fuse Console で表示する) は以下である必要があります。

- Fuse Console がインストールされているのと同じ OpenShift クラスタにインストールする必要があります。
- AMQ Broker ドキュメントの [Fuse Console で Artemis プラグインを有効にする](#) セクションの説明に従って、Fuse Console がそれを認識して接続できるように設定します。

手順

- **Artemis** をクリックして AMQ 管理コンソールを表示し、AMQ ブローカーの状態を監視します。AMQ ブローカーは [Apache ActiveMQ Artemis](#) を基にしています。

AMQ 管理コンソールの使用に関する詳細は、**Managing AMQ Broker**の2章 [Using AMQ Management Console](#)を参照してください。

1.7. JMX ドメインおよび MBEAN の表示および管理

JMX (Java Management Extensions) は、実行時にリソース (サービス、デバイス、およびアプリケーション) を動的に管理できる Java 技術です。リソースは MBean (Managed Bean) と呼ばれるオブジェクトで表現されます。リソースは、作成、実装、またはインストール後、すぐに管理および監視できます。

Fuse Console で JMX プラグインを使用すると、JMX ドメインと MBean を表示および管理できます。MBean 属性の表示、コマンドの実行、および MBean の統計を示すチャートの作成を行うことができます。

JMX タブは、フォルダーに整理されたアクティブな JMX ドメインと MBean のツリービューを提供します。詳細を確認し、MBean でコマンドを実行できます。

手順

1. MBean 属性を表示および編集するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで MBean を選択します。
 - b. **Attributes** タブをクリックします。
 - c. 属性をクリックしてその詳細を表示します。
2. 操作を実行するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで MBean を選択します。
 - b. **Operations** タブをクリックし、リストにある操作の1つをデプロイメントします。
 - c. **Execute** をクリックし、操作を実行します。
3. チャートを表示するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで項目を選択します。
 - b. **Chart** タブをクリックします。

1.8. 診断の表示

Diagnostics タブを使用して、JVM DiagnosticCommand および HotspotDiagnostic インターフェイスから JVM に関する診断情報を表示します。



注記

この機能は、Java Mission Control (jmc) の **Diagnostic Commands** ビューや、コマンドラインツールの jcmd と似ています。場合によっては、プラグインが対応する jcmd コマンドを提供します。

手順

1. ロードされたクラスのインスタンス数や、これらのインスタンスが使用するバイト数を取得するには、**Class Histogram** をクリックします。操作が繰り返し行われた場合、最後の操作実行との差異がタブに表示されます。
2. JVM 診断のフラグ設定を表示するには、**JVM flags** をクリックします。
3. 稼働中の JVM でもフラグ設定を変更できます。

関連情報

サポートされる JVM はプラットフォームによって異なります。詳細は以下を参照してください。

- <http://www.oracle.com/technetwork/java/vmoptions-jsp-140102.html>
- <http://openjdk.java.net/groups/hotspot/docs/RuntimeOverview.html>

1.9. スレッドの表示

スレッドの状態を表示および監視できます。

手順

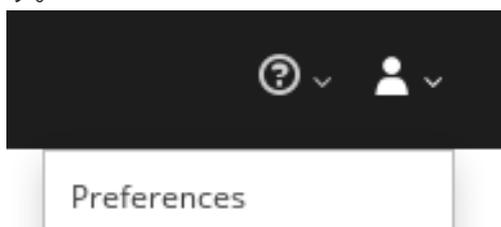
1. **Runtime** タブをクリックし、**Threads** サブタブをクリックします。**Threads** ページには、アクティブなスレッドと各スレッドのスタックトレースの詳細が表示されます。デフォルトでは、スレッドリストにはすべてのスレッドが ID 値が大きい順に表示されます。
2. ID 値が小さい順に表示するには、**ID** 列ラベルをクリックします。
3. 任意で、スレッドの状態 (例: **Blocked**) やスレッド名でリストを絞り込むことができます。
4. ロッククラス名やスレッドのフルスタックトレースなど、特定スレッドの詳細情報を表示するには、**Actions** 列で **More** をクリックします。

1.10. FUSE CONSOLE でデータが正しく表示されるよう確認

Fuse Console のキューおよび接続の表示で、不足しているキューや接続があったり、一貫性のないアイコンが表示される場合は、Jolokia コレクションサイズパラメーターを調節します。このパラメーターは、Jolokia が応答でマーシャルするアレイの最大要素数を指定するものです。

手順

1. Fuse Console の右上隅にあるユーザーアイコンをクリックして、**Preferences** をクリックします。



2. **Maximum collection size** オプションの値を大きくします (デフォルトは 50,000)。
3. **Close** をクリックします。

第2章 SPRING BOOT スタンドアロンでの RED HAT FUSE アプリケーションの監視および管理

2.1. FUSE CONSOLE

Red Hat Fuse Console は、Hawtio オープンソースソフトウェアをベースとする Web コンソールです。サポートされるブラウザのリストは [Red Hat Fuse でサポートされる構成](#) を参照してください。

Fuse Console は、デプロイされた1つ以上の Fuse コンテナの詳細を確認および管理するための中央インターフェイスを提供します。また、Red Hat Fuse およびシステムリソースの監視、更新の実行、およびサービスの起動と停止を行うこともできます。

Fuse Console は、Red Hat Fuse スタンドアロンをインストールするか、Fuse on OpenShift を使用する場合に利用できます。Fuse Console で表示および管理できるインテグレーションは、実行されているプラグインによって異なります。使用できるプラグインには以下が含まれます。

- Camel
- JMX
- OSGI
- Runtime
- Logs

2.2. SPRING BOOT 2.X の FUSE CONSOLE へのアクセス

スタンドアロン Fuse Spring Boot 2.x ディストリビューションの Fuse Console にアクセスできます。

手順

1. 以下の依存関係を Fuse アプリケーションの **pom.xml** ファイルに追加します。

```
<dependency>
  <groupId>io.hawtio</groupId>
  <artifactId>hawtio-springboot</artifactId>
</dependency>
```

バージョンは Maven BOM によって提供されるため、指定する必要はありません。

2. **src/main/resources/application.properties** ファイルを編集します。
 - a. 以下のプロパティを設定します。
 - **management.endpoints.web.exposure.include=hawtio,jolokia**
 - **hawtio.authenticationEnabled=false**
 - **management.endpoint.hawtio.enabled=true**
 - **management.endpoint.jolokia.enabled=true**
 - b. 任意で、**management.endpoints.web.base-path** プロパティを設定します。

Spring Boot 2.x のデフォルトでは、Fuse Console の URL に管理エンドポイントのコンテキストパス (**actuator**) が含まれます。以下に例を示します。

<http://localhost:10001/actuator/hawtio/index.html>

このデフォルト URL を変更し、<http://localhost:10001/hawtio> を指定するには、**management.endpoints.web.base-path** プロパティを以下のように設定します。

management.endpoints.web.base-path=/

application.properties 設定は以下の例のようになるはずです。

```
# ports

server.port=8080

management.server.port=10001

# enable management endpoints for healthchecks and hawtio

management.endpoints.enabled-by-default = false

management.endpoint.hawtio.enabled = true

management.endpoint.jolokia.enabled = true

management.endpoints.health.enabled = true

management.health.defaults.enabled=false

camel.health.enabled=false

camel.health.indicator.enabled=true

management.endpoints.web.exposure.include=hawtio,jolokia

hawtio.authenticationEnabled=false

# change the URL so that it does not include the actuator folder

management.endpoints.web.base-path=
```



注記

デフォルトでは、Spring Boot の Fuse Console の認証は無効になっています。任意で、Fuse Console ディストリビューションに固有するコードを作成すると、認証を有効にすることができます。例は次のとおりです。

<https://github.com/hawtio/hawtio/tree/master/examples/springboot-authentication>

3. Fuse アプリケーションを実行します。

```
mvn spring-boot:run
```

4. Fuse Console の URL のポート番号を特定するには、**src/main/resources/application.properties** ファイルで **management.server.port** の設定値を見つけます。以下に例を示します。

```
management.server.port = 10001
```

5. ブラウザーで Fuse Console を開くには、以下の URL 構文を使用します。nnnnn は **management.server.port** プロパティの値に置き換えます。

<http://localhost:nnnnn/actuator/hawtio>

たとえば、**management.server.port** プロパティの値が **10001**

で、**management.endpoints.web.base-path** プロパティが設定されていない場合、URL は以下になります。

<http://localhost:10001/actuator/hawtio/index.html>

2.3. FUSE CONSOLE ブランディングのカスタマイズ

hawtconfig.json ファイルを Fuse on Spring Boot スタンドアロンアプリケーションに追加すると、タイトル、ロゴ、ログインページの情報などの Fuse Console ブランディング情報をカスタマイズできます。

手順

1. ローカルの Fuse on Spring Boot スタンドアロンアプリケーションの **src/main/webapp** ディレクトリに **hawtconfig.json** という名前の JSON ファイルを作成します。
2. 任意のエディターで **src/main/webapp/hawtconfig.json** を開き、以下の内容を追加します。

```
{
  "branding": {
    "appName": "Red Hat Fuse Console",
    "appLogoUrl": "img/Logo-Red_Hat-Fuse-A-Reverse-RGB.png",
    "companyLogoUrl": "img/Logo-RedHat-A-Reverse-RGB.png"
  },
  "login": {
    "description": "",
    "links": []
  },
  "about": {
    "title": "Red Hat Fuse Console",
    "productInfo": [],
    "additionalInfo": "",
    "copyright": "",
    "imgSrc": "img/Logo-RedHat-A-Reverse-RGB.png"
  },
  "disabledRoutes": [
    "/camel/source",
    "/diagnostics",
    "/jvm/discover",
    "/jvm/local"
  ]
}
```

3. 表A.1「Fuse Console 設定プロパティ」に記載されている設定プロパティの値を変更します。
4. 変更を保存します。
5. 以下のコマンドを使用して Fuse on Spring Boot を実行します。

```
mvn spring-boot:run
```

6. Web ブラウザーで、URL <http://localhost:10001/actuator/hawtio/index.html> を使用して、Fuse Console を開きます。



注記

Web ブラウザーで Fuse Console をすでに実行した場合、ブランディングはブラウザーのローカルストレージに保存されます。新しいブランディング設定を使用するには、ブラウザーのローカルストレージをクリアする必要があります。

2.4. FUSE CONSOLE のセキュア化

Spring Boot で Fuse Console をセキュアにするには、以下を行います。

- **AWS へのデプロイ時に Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効化**
スタンドアロン Fuse アプリケーションを Amazon Web Services (AWS) にデプロイする場合、**hawtio.disableProxy** システムプロパティを **true** に設定して、Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効にする必要があります。



注記

Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効にすると、Fuse Console の **Connect** タブが無効になり、Fuse Console から他の JVM に接続できなくなります。AWS に複数の Fuse アプリケーションをデプロイする場合は、アプリケーションごとに Fuse Console をデプロイする必要があります。

- **HTTPS を必須プロトコルとして設定する**
hawtio.http.strictTransportSecurity プロパティを使用すると、Web ブラウザーでセキュアな HTTPS プロトコルを使用して Fuse Console にアクセスするよう要求できます。このプロパティにより、HTTP を使用して Fuse Console へのアクセスを試みる Web ブラウザーで、HTTPS を使用するようにリクエストを自動的に変換することが必須になります。
- **公開鍵を使用して応答をセキュアにする**
hawtio.http.publicKeyPins プロパティを使用すると、特定の暗号化の公開鍵を Fuse Console に関連付けるように Web ブラウザーに指示し、偽造証明書による "中間者攻撃" のリスクを軽減することで、HTTPS プロトコルをセキュアにできます。

手順

1. **hawtio.http.strictTransportSecurity** および **hawtio.http.publicKeyPins** プロパティを以下の例のように設定します。

```
public static void main(String[] args) {
    System.setProperty("hawtio.http.strictTransportSecurity", "max-age=31536000;
includeSubDomains; preload");
    System.setProperty("hawtio.http.publicKeyPins", "pin-
```

```
sha256=cUPcTAZWKaASuYWhhneDttWpY3oBAkE3h2+soZS7sWs"; max-age=5184000;
includeSubDomains");
    SpringApplication.run(YourSpringBootApplication.class, args);
}
```

- (AWS のみにデプロイする場合) Fuse Console のプロキシーサブレットを無効にするには、以下の例のように **hawtio.disableProxy** プロキシーを設定します。

```
public static void main(String[] args) {
    System.setProperty("hawtio.disableProxy", "true");
}
```

関連情報

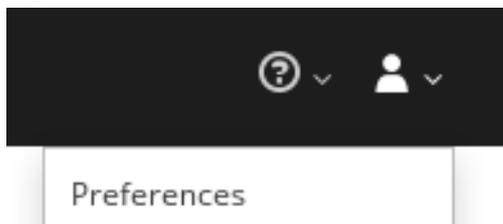
- hawtio.http.strictTransportSecurity** プロパティの構文の説明は、[HTTP Strict Transport Security \(HSTS\) 応答ヘッダーの説明ページ](#)を参照してください。
- hawtio.http.publicKeyPins** プロパティの構文や、Base64 でエンコードされた公開鍵の抽出方法の説明は、[HTTP Public Key Pinning 応答ヘッダーの説明ページ](#)を参照してください。

2.5. FUSE CONSOLE でデータが正しく表示されるよう確認

Fuse Console のキューおよび接続の表示で、不足しているキューや接続があったり、一貫性のないアイコンが表示される場合は、Jolokia コレクションサイズパラメーターを調節します。このパラメーターは、Jolokia が応答でマーシャルするアレイの最大要素数を指定するものです。

手順

- Fuse Console の右上隅にあるユーザーアイコンをクリックして、**Preferences** をクリックします。



- Maximum collection size** オプションの値を大きくします (デフォルトは 50,000)。
- Close** をクリックします。

2.6. リモート FUSE アプリケーションへの接続

Fuse Console は Jolokia を使用します。Jolokia は Java Management Extensions (JMX) へのエージェントベースのアプローチであり、クライアントへの追加ソフトウェア (エージェント) のインストールを必要とします。Red Hat Fuse には jolokia エージェントがデフォルトで含まれています。

スタンドアロン Fuse Console ディストリビューションでは、内部ですでに jolokia エージェント (<https://jolokia.org/>) が実行されているリモートインテグレーションに接続できます。接続するプロセス内に jolokia エージェントがない場合は、jolokia のドキュメント (<http://jolokia.org/agent.html>) を参照してください。

手順

Fuse Console のプロキシサーバレットはホワイトリストを使用してホストを保護し、Fuse Console はデフォルトではローカルホストのみに接続できます。Fuse Console を他のリモート Fuse インスタンスに接続する場合は、Spring Boot アプリケーションの `main()` メソッドにある `hawtio.proxyWhitelist` プロパティを以下のように設定する必要があります。

```
System.setProperty("hawtio.proxyWhitelist", "localhost, 127.0.0.1, myhost1, myhost2, myhost3");
```

2.6.1. リモート Jolokia エージェントへの接続

作業を開始する前に、リモート Jolokia エージェントの接続詳細 (ホスト名、ポート、およびパス) を知っておく必要があります。

Spring Boot の Jolokia エージェントのデフォルト接続 URL は <http://<host>:8080/jolokia> です。

システム管理者はこのデフォルト設定を変更できます。

通常、Jolokia エージェントにリモートで接続する URL は、Fuse Console を開く URL に `/jolokia` を追加したものです。たとえば、Fuse Console を開く URL が <http://<host>:1234/hawtio> の場合、リモート接続の URL は <http://<host>:1234/hawtio/jolokia> になります。

JVMを確認するためにリモート Jolokia インスタンスに接続するには、以下を行います。

1. **Connect** タブをクリックします。
2. **Remote** タブをクリックし、**Add connection** をクリックします。
3. **Name**、**Scheme** (HTTP または HTTPS)、および **hostname** を入力します。
4. **Test Connection** をクリックします。
5. **Add** をクリックします。



注記

Fuse Console は自動的にローカルホストと 127.0.0.1 以外のローカルネットワークインターフェイスをプローブし、ホワイトリストに追加します。そのため、ローカルマシンのアドレスを手作業でホワイトリストに登録する必要はありません。

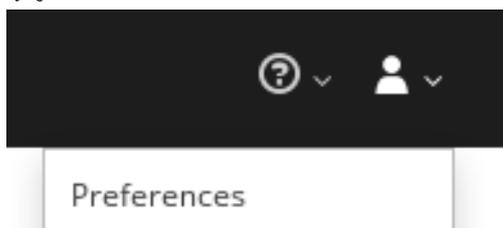
2.6.2. データ移動設定の指定

Fuse Console に表示されるデータをより頻繁にリフレッシュする場合などに、以下の Jolokia 設定を変更できます。データの更新を頻繁に行うと、ネットワークトラフィックに影響し、サーバーに対するリクエストの数が増加するため注意してください。

- **Update rate** - JMX データを取得するため Jolokia へポーリングを行う間隔 (デフォルトは 5 秒)。
- **Maximum depth** - オブジェクトを返す前に、Jolokia がサーバー側でオブジェクトを JSON にマーシャルする際のレベル数 (デフォルトは 7)。
- **Maximum collection size** - 応答で Jolokia がマーシャルするアレイの最大要素数 (デフォルトは 50,000)。

これらの設定の値を変更するには、以下を行います。

1. Fuse Console の右上にあるユーザーアイコンをクリックして、**Preferences** をクリックします。



2. オプションを編集して **Close** をクリックします。

2.6.3. JVM ランタイム情報の表示

システムプロパティ、メトリック、スレッドなどの JVM のランタイム情報を表示するには、**Runtime** タブをクリックします。

2.7. APACHE CAMEL アプリケーションの表示および管理

Fuse Console の **Camel** タブで Apache Camel のコンテキスト、ルート、および依存関係を表示および管理します。

次の詳細を表示できます。

- 実行中の Camel コンテキストすべてのリスト。
- Camel バージョン番号やランタイム統計など、各 Camel コンテキストの詳細情報。
- 各 Camel アプリケーションの全ルートおよびランタイム統計のリスト。
- 実行中のルートとリアルタイムのメトリクスのグラフィカル表示。

また、以下を行うと Camel アプリケーションと対話もできます。

- コンテキストの起動および一時停止。
- 再起動、停止、一時停止、再開などを実行できるように、すべての Camel アプリケーションとそれらのルートのライフサイクルを管理すること。
- 実行中のルートのライブトレースおよびデバッグ。
- Camel エンドポイントへのメッセージの閲覧および送信。

前提条件

Camel タブは、1つ以上の Camel ルートを使用するコンテナに接続する場合のみ使用できます。

2.7.1. コンテキストの起動、一時停止、または削除

1. Camel タブのツリービューで、**Camel Contexts** をクリックします。
2. リストのコンテキストの横にあるボックスにチェックマークを入れます。
3. **Start** または **Suspend** をクリックします。
4. コンテキストを削除するには以下を行います。

- a. コンテキストを停止します。
- b. 楕円のアイコンをクリックし、ドロップダウンメニューで **Delete** を選択します。



注記

コンテキストを削除する場合、デプロイされたアプリケーションから削除します。

2.7.2. Camel アプリケーションの詳細表示

1. Camel タブのツリービューで、Camel アプリケーションをクリックします。
2. アプリケーションの属性と値のリストを表示するには、**Attributes** をクリックします。
3. アプリケーション属性をグラフィカルに表示するには、**Chart** をクリックした後、**Edit** をクリックし、チャートに表示する属性を選択します。
4. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
5. アプリケーションエンドポイントを表示するには、**Endpoints** をクリックします。リストは **URL**、**Route ID**、および **direction** で絞り込むことができます。
6. メッセージ本文とメッセージヘッダーを別のタイプに変換するために使用される Camel 組み込みタイプ変換メカニズムに関連する統計を表示、有効化、および無効化するには、**Type Converters** をクリックします。
7. JMX 操作 (XML からのルート追加または更新、クラスパスで利用できる Camel コンポーネントの検索など) を表示および実行するには、**Operations** をクリックします。

2.7.3. Camel ルートリストの表示および Camel ルートとの対話

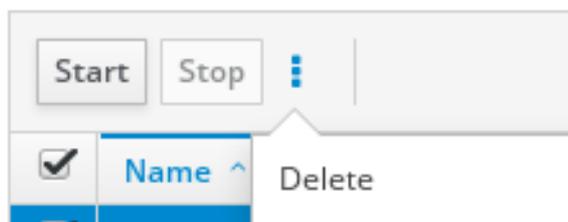
1. ルートのリストを表示するには、以下を行います。
 - a. Camel タブをクリックします。
 - b. ツリービューでアプリケーションの routes フォルダーをクリックします。

Routes

<input type="checkbox"/>	Name ^	State
<input type="checkbox"/>	_route1	Started
<input type="checkbox"/>	_route2	Started

2. 1つまたは複数のルートを起動、停止、または削除するには、以下を行います。
 - a. リストのルートの横にあるボックスにチェックマークを入れます。
 - b. **Start** または **Stop** をクリックします。
 - c. 最初にルートを停止してから削除する必要があります。停止したら楕円のアイコンをクリックし、ドロップダウンメニューで **Delete** を選択します。

Routes



注記

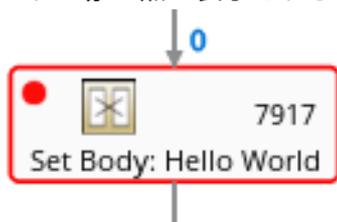
- ルートを削除する場合、デプロイされたアプリケーションから削除します。
- ツリービューで特定のルートを選択し、右上のメニューをクリックして起動、停止、または削除することもできます。

3. ルートのグラフィカルな図を表示するには、**Route Diagram** をクリックします。
4. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
5. エンドポイントを表示するには、**Endpoints** をクリックします。URL、Route ID、および方向でリストを絞り込むことができます。
6. **Type Converters** をクリックし、Camel の組み込みタイプ変換メカニズムに関連する統計を表示、有効化、および無効化します。このメカニズムはメッセージ本文とメッセージヘッダーを別のタイプに変換するために使用されます。
7. 特定のルートと対話するには、以下を行います。
 - a. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
 - b. ルート属性と値のリストを表示するには、**Attributes** をクリックします。
 - c. ルート属性をグラフィカルに表示するには、**Chart** をクリックします。**Edit** をクリックすると、チャートに表示する属性を選択できます。
 - d. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
 - e. **Operations** をクリックして JMX 操作 (ルートを XML としてダンプ、ルートの Camel ID 値の取得など) を表示および実行できます。
8. ルートを介してメッセージをトレースするには、以下を実行します。
 - a. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
 - b. **Trace** を選択し、**Start tracing** をクリックします。
9. メッセージをルートに送信するには、以下を行います。
 - a. **Camel** タブのツリービューでコンテキストのエンドポイントフォルダーを開き、エンドポイントを選択します。
 - b. **Send** サブタブをクリックします。

- c. JSON または XML 形式のメッセージを設定します。
- d. **Send** をクリックします。
- e. ルートの **Trace** タブに戻り、ルートを紹介したメッセージのフローを確認します。

2.7.4. ルートのデバッグ

1. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
2. **Debug** を選択し、**Start debugging** をクリックします。
3. ブレークポイントを追加するには、図のノードを選択し、**Add breakpoint** をクリックします。ノードに赤い点が表示されます。



ノードがブレークポイントのリストに追加されます。

Breakpoints	
setBody1	×
log1	×

4. 下矢印をクリックして次のノードに移動するか、**Play** ボタンをクリックしてルートの実行を再開します。
5. **Pause** ボタンをクリックして、ルートのすべてのスレッドを一時停止します。
6. 終了したら **Stop debugging** をクリックします。すべてのブレークポイントが消去されます。

2.8. JMX ドメインおよび MBEAN の表示および管理

JMX (Java Management Extensions) は、実行時にリソース (サービス、デバイス、およびアプリケーション) を動的に管理できる Java 技術です。リソースは MBean (Managed Bean) と呼ばれるオブジェクトで表現されます。リソースは、作成、実装、またはインストール後、すぐに管理および監視できます。

Fuse Console で JMX プラグインを使用すると、JMX ドメインと MBean を表示および管理できます。MBean 属性の表示、コマンドの実行、および MBean の統計を示すチャートの作成を行うことができます。

JMX タブは、フォルダーに整理されたアクティブな JMX ドメインと MBean のツリービューを提供します。詳細を確認し、MBean でコマンドを実行できます。

手順

1. MBean 属性を表示および編集するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで MBean を選択します。

- b. **Attributes** タブをクリックします。
 - c. 属性をクリックしてその詳細を表示します。
2. 操作を実行するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで MBean を選択します。
 - b. **Operations** タブをクリックし、リストにある操作の1つをデプロイメントします。
 - c. **Execute** をクリックし、操作を実行します。
 3. チャートを表示するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで項目を選択します。
 - b. **Chart** タブをクリックします。

2.9. 診断の表示

Diagnostics タブを使用して、JVM DiagnosticCommand および HotspotDiagnostic インターフェイスから JVM に関する診断情報を表示します。



注記

この機能は、Java Mission Control (jmc) の **Diagnostic Commands** ビューや、コマンドラインツールの jcmd と似ています。場合によっては、プラグインが対応する jcmd コマンドを提供します。

手順

1. ロードされたクラスのインスタンス数や、これらのインスタンスが使用するバイト数を取得するには、**Class Histogram** をクリックします。操作が繰り返し行われた場合、最後の操作実行との差異がタブに表示されます。
2. JVM 診断のフラグ設定を表示するには、**JVM flags** をクリックします。
3. 稼働中の JVM でもフラグ設定を変更できます。

関連情報

サポートされる JVM はプラットフォームによって異なります。詳細は以下を参照してください。

- <http://www.oracle.com/technetwork/java/vmoptions-jsp-140102.html>
- <http://openjdk.java.net/groups/hotspot/docs/RuntimeOverview.html>

2.10. スレッドの表示

スレッドの状態を表示および監視できます。

手順

1. **Runtime** タブをクリックし、**Threads** サブタブをクリックします。**Threads** ページには、アクティブなスレッドと各スレッドのスタックトレースの詳細が表示されます。デフォルトでは、スレッドリストにはすべてのスレッドが ID 値が大きい順に表示されます。

2. ID 値が小さい順に表示するには、**ID** 列ラベルをクリックします。
3. 任意で、スレッドの状態 (例: **Blocked**) やスレッド名でリストを絞り込むことができます。
4. ロッククラス名やスレッドのフルスタックトレースなど、特定スレッドの詳細情報を表示するには、**Actions** 列で **More** をクリックします。

第3章 KARAF スタンドアロンでの RED HAT FUSE アプリケーションの監視および管理

3.1. FUSE CONSOLE

Red Hat Fuse Console は、Hawtio オープンソースソフトウェアをベースとする Web コンソールです。サポートされるブラウザのリストは [Red Hat Fuse でサポートされる構成](#) を参照してください。

Fuse Console は、デプロイされた1つ以上の Fuse コンテナの詳細を確認および管理するための中央インターフェイスを提供します。また、Red Hat Fuse およびシステムリソースの監視、更新の実行、およびサービスの起動と停止を行うこともできます。

Fuse Console は、Red Hat Fuse スタンドアロンをインストールするか、Fuse on OpenShift を使用する場合に利用できます。Fuse Console で表示および管理できるインテグレーションは、実行されているプラグインによって異なります。使用できるプラグインには以下が含まれます。

- Camel
- JMX
- OSGI
- Runtime
- Logs

3.2. FUSE CONSOLE へのアクセス

Apache Karaf スタンドアロンの Fuse Console にアクセスするには、以下の手順に従います。

前提条件

Karaf コンテナに Fuse をインストールします。ステップごとの手順は [Installing on Apache Karaf](#) を参照してください。

手順

1. コマンドラインで、Red Hat Fuse をインストールしたディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行して Fuse スタンドアロンを起動します。

```
./bin/fuse
```

Karaf コンソールが起動し、バージョン情報、デフォルトの Fuse Console URL、および一般的なコマンドのリストが表示されます。

2. ブラウザーで URL を入力し、Fuse Console に接続します。例: <http://localhost:8181/hawtio>
3. ログインページでユーザー名とパスワードを入力し、**Log In** をクリックします。

デフォルトでは、Fuse Console に Home ページが表示されます。左側のナビゲーションタブには実行中のプラグインが表示されます。

3.3. FUSE CONSOLE のセキュア化

Apache Karaf で Fuse Console をセキュアにするには、以下を行います。

- **AWS へのデプロイ時に Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効化**
スタンドアロン Fuse アプリケーションを Amazon Web Services (AWS) にデプロイする場合、**hawtio.disableProxy** システムプロパティを **true** に設定して、Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効にする必要があります。



注記

Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効にすると、Fuse Console の **Connect** タブが無効になり、Fuse Console から他の JVM に接続できなくなります。AWS に複数の Fuse アプリケーションをデプロイする場合は、アプリケーションごとに Fuse Console をデプロイする必要があります。

- **HTTPS を必須プロトコルとして設定する**
hawtio.http.strictTransportSecurity プロパティを使用すると、Web ブラウザーでセキュアな HTTPS プロトコルを使用して Fuse Console にアクセスするよう要求できます。このプロパティにより、HTTP を使用して Fuse Console へのアクセスを試みる Web ブラウザーで、HTTPS を使用するようにリクエストを自動的に変換することが必須になります。
- **公開鍵を使用して応答をセキュアにする**
hawtio.http.publicKeyPins プロパティを使用すると、特定の暗号化の公開鍵を Fuse Console に関連付けるように Web ブラウザーに指示し、偽造証明書による "中間者攻撃" のリスクを軽減することで、HTTPS プロトコルをセキュアにできます。
- **SSL/TLS セキュリティーを有効にする**
SSL/TLS セキュリティーは、Fuse Console ではデフォルトで有効になっていません。Fuse Console で SSL/TLS セキュリティーを有効にして、ユーザー名およびパスワードのクレデンシャルをスヌーピングから保護することが推奨されます。
- **Red Hat Single Sign On を実装する**
- **ユーザーのアクセスを制御する**
認証されたユーザーが実行できる操作は、そのユーザーに割り当てられたロールによって異なります。表3.1「Karaf スタンドアロンでのロールベースアクセス」を参照してください。

手順

1. HTTPS を必須のプロトコルとして設定するには、**\$KARAF_HOME/etc/system.properties** ファイルの **hawtio.http.strictTransportSecurity** プロパティを以下の例のように設定します。

```
hawtio.http.strictTransportSecurity = max-age=31536000; includeSubDomains; preload
```

2. 公開鍵を使用して応答をセキュアにするには、**\$KARAF_HOME/etc/system.properties** ファイルの **hawtio.http.publicKeyPins** プロパティを以下の例のように設定します。

```
hawtio.http.publicKeyPins = pin-sha256="cUPcTAZWKaASuYWhhneDttWpY3oBAkE3h2+soZS7sWs"; max-age=5184000; includeSubDomains
```

3. (AWS のみにデプロイする場合) Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効にするには、以下の例のように **\$KARAF_HOME/etc/system.properties** ファイルで **hawtio.disableProxy** プロパティを **true** に設定します。

```
hawtio.disableProxy = true;
```

4. SSL/TLS セキュリティーを有効にする方法の詳細は、[Apache Karaf Security Guide](#) の Enabling SSL/TLS for Undertow in an Apache Karaf container を参照してください。
5. Red Hat Single Sign-On で Fuse Console をセキュアにする方法は、[Red Hat Single Sign On アプリケーションおよびサービスのセキュリティー保護ガイド](#) の「Hawtio 管理コンソールのセキュリティー保護」セクションを参照してください。
6. 以下の手順に従ってユーザーロールを設定し、必要な Fuse Console 操作を実行できる権限をユーザーに付与します。
 - a. エディターで Red Hat Fuse **etc/users.properties** ファイルを開きます。
 - b. ユーザー名、パスワード、およびロールのエントリーを追加します。
たとえば、**etc/users.properties** ファイルの以下のエントリーは管理ユーザーを定義し、管理ロールを割り当てます。

```
admin = secretpass,admin
```

- c. ファイルを保存します。

関連情報

- **hawtio.http.strictTransportSecurity** プロパティの構文の説明は、[HTTP Strict Transport Security \(HSTS\)](#) 応答ヘッダーの説明ページを参照してください。
- **hawtio.http.publicKeyPins** プロパティの構文や、Base64 でエンコードされた公開鍵の抽出方法の説明は、[HTTP Public Key Pinning](#) 応答ヘッダーの説明ページを参照してください。

3.4. ロールベースのアクセス参照

認証されたユーザーが実行できる操作は、そのユーザーに割り当てられたロールによって異なります。表3.1「[Karaf スタンドアロンでのロールベースアクセス](#)」を参照してください。

表3.1 Karaf スタンドアロンでのロールベースアクセス

操作	admin	manager	viewer
ログイン/ログアウト	可能	可能	可能
ヘルプトピックの表示	可能	可能	可能
ユーザー設定の指定	可能	可能	可能
接続			
リモートインテグレーションの検出および接続	可能	可能	可能
ローカルインテグレーションの検出および接続	可能	可能	可能

操作	admin	manager	viewer
Camel			
実行中の Camel アプリケーションをすべて表示	可能	可能	可能
Camel コンテキストの起動、一時停止、再開、および削除	可能	可能	
メッセージの送信	可能	可能	
エンドポイントの追加	可能	可能	
ルート、ルート図、およびランタイム統計の表示	可能	可能	可能
ルートの起動と停止	可能	可能	
ルートの削除	可能	可能	
JMX			
属性値の変更	可能	可能	
タイムベースチャートで属性を選択および表示	可能	可能	可能
操作の表示	可能	可能	可能
OSGI			
バンドル、機能、パッケージ、サービス、サーバー、フレームワーク、および設定を表示	可能	可能	可能
バンドルの追加および削除	可能	可能	
設定の追加	可能	可能	
機能のインストールおよびアンインストール	可能		
Runtime			

操作	admin	manager	viewer
システムプロパティ、メトリック、およびスレッドの表示	可能	可能	可能
Logs			
ログの表示	可能	可能	可能

関連情報

ロールベースアクセス制御の詳細は、[Deploying into Apache Karaf](#) を参照してください。

3.5. FUSE CONSOLE ブランディングのカスタマイズ

Fuse Console ブランディングプラグインを使用すると、タイトル、ロゴ、ログインページの情報などの Fuse Console ブランディング情報をカスタマイズできます。

デフォルトでは、Fuse Console のブランディングは Fuse Console WAR ファイル (**karaf-install-dir/system/io/hawt/hawtio-war/<version>/hawtio-war-<version>.war**) の **hawtconfig.json** で定義されます。Fuse Console ブランディングプラグインを実装すると、デフォルトのブランディングを独自のカスタムブランディングでオーバーライドできます。

手順

1. ブランディングプラグインの例を <https://github.com/hawtio/hawtio/tree/master/examples/branding-plugin> から任意のローカルディレクトリーにダウンロードします。
2. 任意のエディターで、Fuse Console ブランディングプラグインの **src/main/webapp/plugin/brandingPlugin.js** ファイルを開き、Fuse Console ブランディングをカスタマイズします。
[表A.1「Fuse Console 設定プロパティ」](#) に記載されている設定プロパティの値を変更できます。
3. 変更を保存します。
4. 任意のエディターで、Fuse Console ブランディングプラグインの **pom.xml** ファイルを開き、**<parent>** セクションに移動します。

```
<parent>
  <groupId>io.hawt</groupId>
  <artifactId>project</artifactId>
  <version>2.9-SNAPSHOT</version>
  <relativePath>../..</relativePath>
</parent>
```

5. 以下のように **<parent>** セクションを編集します。
 - a. **<version>** プロパティの値を Fuse on Karaf インストールのバージョンに一致するよう変更します。たとえば、Fuse on Karaf インストールディレクトリー名が **2.0.0.fuse-760015** の場合は、バージョンを **2.0.0.fuse-760015** に設定します。

- b. `<relativePath>../..</relativePath>` 行を削除します。
以下に例を示します。

```
<parent>
  <groupId>io.hawt</groupId>
  <artifactId>project</artifactId>
  <version> 2.0.0.fuse-760015</version>
</parent>
```

6. ターミナルウィンドウで、以下のコマンドを実行し、branding-plugin プロジェクトをビルドします。

```
mvn clean install
```

7. Fuse が稼働していない場合は、以下のコマンドを実行して起動します。

Linux/Unix の場合: bin/fuse

Windows の場合: bin\fuse.bat`

8. Karaf CLI プロンプトで以下のコマンドを入力し、Fuse Console ブランディングプラグインをインストールします。<version> は Fuse on Karaf インストールのバージョンに置き換えます。

Linux/Unix の場合: install -s mvn:io.hawt/branding-plugin/<version>/war

Windows の場合: install -s mvn:io.hawt\branding-plugin\<version>\war

9. Web ブラウザーで、7. の起動コマンドによって返された URL を使用して、Fuse Console を開きます (デフォルトの URL は <http://localhost:8181/hawtio/> です)。



注記

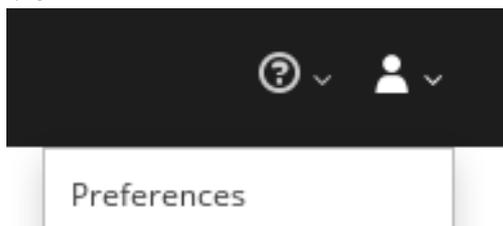
Web ブラウザーで Fuse Console をすでに実行した場合、ブランディングはブラウザーのローカルストレージに保存されます。新しいブランディング設定を使用するには、ブラウザーのローカルストレージをクリアする必要があります。

3.6. FUSE CONSOLE でデータが正しく表示されるよう確認

Fuse Console のキューおよび接続の表示で、不足しているキューや接続があったり、一貫性のないアイコンが表示される場合は、Jolokia コレクションサイズパラメーターを調節します。このパラメーターは、Jolokia が応答でマーシャルするアレイの最大要素数を指定するものです。

手順

1. Fuse Console の右上隅にあるユーザーアイコンをクリックして、Preferences をクリックします。



2. **Maximum collection size** オプションの値を大きくします (デフォルトは 50,000)。
3. **Close** をクリックします。

3.7. FUSE CONSOLE の無効化

Karaf で Fuse Console を無効にすると、他のコンポーネントに影響を与えずにすべてのユーザーをアクセス不可能にすることができます。

手順

1. hawtio-web バンドル ID を特定するには、以下のコマンドを使用して Fuse Console が使用する Fuse バンドルをリストします。
osgi:list | grep hawtio
2. バンドルを停止するには、**osgi:stop** コマンドを使用します。たとえば、**hawtio :: Web console** バンドルの ID が 246 の場合、以下のコマンドを入力します。
osgi:stop 246

バンドルが解決状態になり、Fuse Console にアクセスできなくなります。

関連情報

バンドルの管理に関する詳細は [Deploying into Apache Karaf](#) の Lifecycle Management の章を参照してください。

3.8. リモート FUSE アプリケーションへの接続

Fuse Console は Jolokia を使用します。Jolokia は Java Management Extensions (JMX) へのエージェントベースのアプローチであり、クライアントへの追加ソフトウェア (エージェント) のインストールを必要とします。Red Hat Fuse には jolokia エージェントがデフォルトで含まれています。

スタンドアロン Fuse Console ディストリビューションでは、内部ですでに jolokia エージェント (<https://jolokia.org/>) が実行されているリモートインテグレーションに接続できます。接続するプロセス内に jolokia エージェントがない場合は、jolokia のドキュメント (<http://jolokia.org/agent.html>) を参照してください。

3.8.1. Fuse Console のアンロック

デフォルトでは、Apache Karaf 上の Fuse 7 スタンドアロンの Jolokia はロックされ、Fuse Console はリモートでアクセスできません。

localhost または 127.0.0.1 以外のホスト名または IP アドレスに対して Fuse Console のロックを解除するには、次の手順に従います。

1. エディターで **\$KARAF_HOME/etc/jolokia-access.xml** ファイルを開きます。
2. Fuse Console でアクセスする Fuse インテグレーションのホスト名または IP アドレスを登録するため、**<cors>** セクションにホスト名または IP アドレスを追加します。
たとえば、Fuse Console からホスト名 0.0.0.3 にアクセスするために追加する行は次のとおりです。

```
*<allow-origin>http://0.0.0.3:*</allow-origin>*
```

この行を次のように追加します。

```
<!--
```

```
Cross-Origin Resource Sharing (CORS) restrictions
```

By default, only CORS access within localhost is allowed for maximum security.

You can add trusted hostnames in the `<cors>` section to unlock CORS access from them.

```
-->
<cors>

  <!-- Allow cross origin access only within localhost -->

  <allow-origin>http*://localhost:*</allow-origin>

  <allow-origin>http*://127.0.0.1:*</allow-origin>

  <allow-origin>http://0.0.0.3:*</allow-origin>

  <!-- Whitelist the hostname patterns as <allow-origin> -->

  <!--

  <allow-origin>http*://*.example.com</allow-origin>

  <allow-origin>http*://*.example.com:*</allow-origin>

  -->

  <!-- Check for the proper origin on the server side to protect against CSRF -->

  <strict-checking />

</cors>
```

3. ファイルを保存します。

3.8.2. リモートアクセスの制限

必要に応じて、特定のホストおよび IP アドレスの Fuse Console へのリモートアクセスを制限できます。

HTTP クライアントの IP アドレスを基にして全体的なアクセス権限を割り当てることができます。これらの制限を指定するには、以下を行います。

`jolokia-access.xml` ファイルで、`<host>` 要素が1つ以上含まれる `<remote>` セクションを追加または編集します。`<host>` 要素に対して IP アドレス、ホスト名、または CIDR 形式のネットマスク (例: 10.0 ネットワークからのすべてのクライアントは **10.0.0.0/16**) を指定できます。

以下の例は、ローカルホストと IP アドレスが **10.0** で始まるすべてのクライアントからのアクセスを許可します。他の IP アドレスの場合はアクセスが拒否されます。

```
<remote>
  <host>localhost</host>
  <host>10.0.0.0/16</host>
</remote>
```

詳細は Jolokia のセキュリティーに関するドキュメント (<https://jolokia.org/reference/html/security.html>) を参照してください。

3.8.3. リモート Fuse インスタンスへの接続の許可

Fuse Console のプロキシサーバーレットはホワイトリストを使用してホストを保護し、Fuse Console はデフォルトではローカルホストのみに接続できます。Fuse Console を他のリモート Fuse インスタンスに接続する場合は、ホワイトリストを以下のように設定する必要があります。

Apache Karaf では、**etc/system.properties** ファイルで設定を以下のように変更します。

```
hawtio.proxyWhitelist = localhost, 127.0.0.1, myhost1, myhost2, myhost3
```

3.8.4. リモート Jolokia エージェントへの接続

作業を開始する前に、リモート Jolokia エージェントの接続詳細 (ホスト名、ポート、およびパス) を知っておく必要があります。

Fuse on Apache Karaf における Jolokia エージェントのデフォルトの接続 URL は <http://<host>:8181/hawtio/jolokia> になります。

システム管理者はこのデフォルト設定を変更できます。

通常、Jolokia エージェントにリモートで接続する URL は、Fuse Console を開く URL に **/jolokia** を追加したものです。たとえば、Fuse Console を開く URL が <http://<host>:1234/hawtio> の場合、リモート接続の URL は <http://<host>:1234/hawtio/jolokia> になります。

JVMを確認するためにリモート Jolokia インスタンスに接続するには、以下を行います。

1. **Connect** タブをクリックします。
2. **Remote** タブをクリックし、**Add connection** をクリックします。
3. **Name**、**Scheme** (HTTP または HTTPS)、および **hostname** を入力します。
4. **Test Connection** をクリックします。
5. **Add** をクリックします。



注記

Fuse Console は自動的にローカルホストと 127.0.0.1 以外のローカルネットワークインターフェイスをプローブし、ホワイトリストに追加します。そのため、ローカルマシンのアドレスを手作業でホワイトリストに登録する必要はありません。

3.8.5. データ移動設定の指定

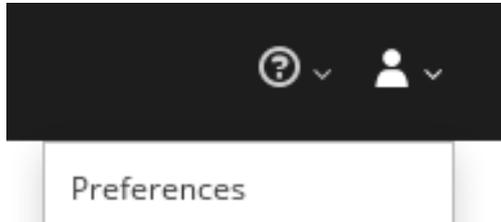
Fuse Console に表示されるデータをより頻繁にリフレッシュする場合などに、以下の Jolokia 設定を変更できます。データの更新を頻繁に行うと、ネットワークトラフィックに影響し、サーバーに対するリクエストの数が増加するため注意してください。

- **Update rate** - JMX データを取得するため Jolokia へポーリングを行う間隔 (デフォルトは 5 秒)。

- **Maximum depth** - オブジェクトを返す前に、Jolokia がサーバー側でオブジェクトを JSON にマーシャルする際のレベル数 (デフォルトは 7)。
- **Maximum collection size** - 応答で Jolokia がマーシャルするアレイの最大要素数 (デフォルトは 50,000)。

これらの設定の値を変更するには、以下を行います。

1. Fuse Console の右上にあるユーザーアイコンをクリックして、**Preferences** をクリックします。



2. オプションを編集して **Close** をクリックします。

3.8.6. JVM ランタイム情報の表示

システムプロパティ、メトリック、スレッドなどの JVM のランタイム情報を表示するには、**Runtime** タブをクリックします。

3.9. APACHE CAMEL アプリケーションの表示および管理

Fuse Console の **Camel** タブで Apache Camel のコンテキスト、ルート、および依存関係を表示および管理します。

次の詳細を表示できます。

- 実行中の Camel コンテキストすべてのリスト。
- Camel バージョン番号やランタイム統計など、各 Camel コンテキストの詳細情報。
- 各 Camel アプリケーションの全ルートおよびランタイム統計のリスト。
- 実行中のルートとリアルタイムのメトリクスのグラフィカル表示。

また、以下を行うと Camel アプリケーションと対話もできます。

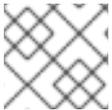
- コンテキストの起動および一時停止。
- 再起動、停止、一時停止、再開などを実行できるよう、すべての Camel アプリケーションとそれらのルートのライフサイクルを管理すること。
- 実行中のルートのライブトレースおよびデバッグ。
- Camel エンドポイントへのメッセージの閲覧および送信。

前提条件

Camel タブは、1つ以上の Camel ルートを使用するコンテナに接続する場合のみ使用できます。

3.9.1. コンテキストの起動、一時停止、または削除

1. Camel タブのツリービューで、**Camel Contexts** をクリックします。
2. リストのコンテキストの横にあるボックスにチェックマークを入れます。
3. **Start** または **Suspend** をクリックします。
4. コンテキストを削除するには以下を行います。
 - a. コンテキストを停止します。
 - b. 楕円のアイコンをクリックし、ドロップダウンメニューで **Delete** を選択します。



注記

コンテキストを削除する場合、デプロイされたアプリケーションから削除します。

3.9.2. Camel アプリケーションの詳細表示

1. Camel タブのツリービューで、Camel アプリケーションをクリックします。
2. アプリケーションの属性と値のリストを表示するには、**Attributes** をクリックします。
3. アプリケーション属性をグラフィカルに表示するには、**Chart** をクリックした後、**Edit** をクリックし、チャートに表示する属性を選択します。
4. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
5. アプリケーションエンドポイントを表示するには、**Endpoints** をクリックします。リストは **URL**、**Route ID**、および **direction** で絞り込むことができます。
6. メッセージ本文とメッセージヘッダーを別のタイプに変換するために使用される Camel 組み込みタイプ変換メカニズムに関連する統計を表示、有効化、および無効化するには、**Type Converters** をクリックします。
7. JMX 操作 (XML からのルートへの追加または更新、クラスパスで利用できる Camel コンポーネントの検索など) を表示および実行するには、**Operations** をクリックします。

3.9.3. Camel ルートリストの表示および Camel ルートとの対話

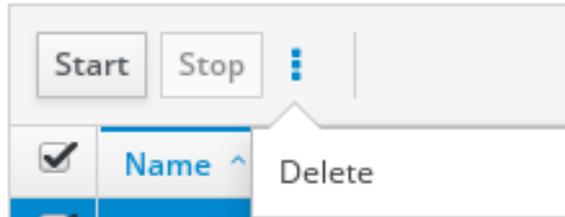
1. ルートのリストを表示するには、以下を行います。
 - a. Camel タブをクリックします。
 - b. ツリービューでアプリケーションの routes フォルダーをクリックします。

Routes

Start Stop ⋮		
<input type="checkbox"/>	Name ^	State
<input type="checkbox"/>	_route1	Started
<input type="checkbox"/>	_route2	Started

2. 1つまたは複数のルートを開始、停止、または削除するには、以下を行います。
 - a. リストのルートの横にあるボックスにチェックマークを入れます。
 - b. **Start** または **Stop** をクリックします。
 - c. 最初にルートを変更してから削除する必要があります。停止したら楕円のアイコンをクリックし、ドロップダウンメニューで **Delete** を選択します。

Routes



注記

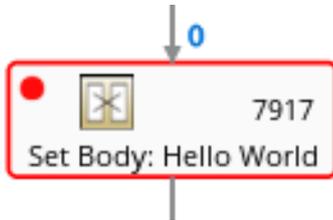
- ルートを削除する場合、デプロイされたアプリケーションから削除します。
- ツリービューで特定のルートを選択し、右上のメニューをクリックして起動、停止、または削除することもできます。

3. ルートのグラフィカルな図を表示するには、**Route Diagram** をクリックします。
4. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
5. エンドポイントを表示するには、**Endpoints** をクリックします。URL、Route ID、および方向でリストを絞り込むことができます。
6. **Type Converters** をクリックし、Camel の組み込みタイプ変換メカニズムに関連する統計を表示、有効化、および無効化します。このメカニズムはメッセージ本文とメッセージヘッダーを別のタイプに変換するために使用されます。
7. 特定のルートと対話するには、以下を行います。
 - a. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
 - b. ルート属性と値のリストを表示するには、**Attributes** をクリックします。
 - c. ルート属性をグラフィカルに表示するには、**Chart** をクリックします。**Edit** をクリックすると、チャートに表示する属性を選択できます。
 - d. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
 - e. **Operations** をクリックして JMX 操作 (ルートを XML としてダンプ、ルートの Camel ID 値の取得など) を表示および実行できます。
8. ルートを介してメッセージをトレースするには、以下を実行します。
 - a. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
 - b. **Trace** を選択し、**Start tracing** をクリックします。

9. メッセージをルートに送信するには、以下を行います。
 - a. **Camel** タブのツリービューでコンテキストのエンドポイントフォルダーを開き、エンドポイントを選択します。
 - b. **Send** サブタブをクリックします。
 - c. JSON または XML 形式のメッセージを設定します。
 - d. **Send** をクリックします。
 - e. ルートの **Trace** タブに戻り、ルートを紹介したメッセージのフローを確認します。

3.9.4. ルートのデバッグ

1. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
2. **Debug** を選択し、**Start debugging** をクリックします。
3. ブレークポイントを追加するには、図のノードを選択し、**Add breakpoint** をクリックします。ノードに赤い点が表示されます。



ノードがブレークポイントのリストに追加されます。

Breakpoints	
setBody1	×
log1	×

4. 下矢印をクリックして次のノードに移動するか、**Play** ボタンをクリックしてルートの実行を再開します。
5. **Pause** ボタンをクリックして、ルートのすべてのスレッドを一時停止します。
6. 終了したら **Stop debugging** をクリックします。すべてのブレークポイントが消去されます。

3.10. JMX ドメインおよび MBEAN の表示および管理

JMX (Java Management Extensions) は、実行時にリソース (サービス、デバイス、およびアプリケーション) を動的に管理できる Java 技術です。リソースは MBean (Managed Bean) と呼ばれるオブジェクトで表現されます。リソースは、作成、実装、またはインストール後、すぐに管理および監視できます。

Fuse Console で JMX プラグインを使用すると、JMX ドメインと MBean を表示および管理できます。MBean 属性の表示、コマンドの実行、および MBean の統計を示すチャートの作成を行うことができます。

JMX タブは、フォルダーに整理されたアクティブな JMX ドメインと MBean のツリービューを提供します。詳細を確認し、MBean でコマンドを実行できます。

手順

1. MBean 属性を表示および編集するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで MBean を選択します。
 - b. **Attributes** タブをクリックします。
 - c. 属性をクリックしてその詳細を表示します。
2. 操作を実行するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで MBean を選択します。
 - b. **Operations** タブをクリックし、リストにある操作の1つをデプロイメントします。
 - c. **Execute** をクリックし、操作を実行します。
3. チャートを表示するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで項目を選択します。
 - b. **Chart** タブをクリックします。

3.11. OSGi 環境の表示および管理

Apache Karaf スタンドアロンディストリビューションでは、Red Hat Fuse OSGi 環境を表示および管理できます。コンテナバンドル、機能、および設定のほか、Java パッケージや OSGi サービスも表示および管理できます。

OSGi タブには、各コンテナコンポーネントのオプションが含まれる複数のサブタブがあります。

Bundles

インストールされたバンドルのリストです。バンドルのインストールおよびアンインストール、バンドルの起動および停止、およびバンドルプロパティの編集を行うことができます。さらに、リストの絞り込みやリストとグリッドビューの切り替えを行うこともできます。

Features

使用できる機能のリスト。機能や機能リポジトリをインストールおよびアンインストールでき、機能の詳細を表示できます。

Packages

Java パッケージのリスト。パッケージバージョンと関連するバンドルを表示できます。

Services

実行中のサービスのリスト。サービス ID、関連するバンドル、およびオブジェクトクラスを表示できます。

Declarative Services

宣言的 OSGi サービスのリスト。サービスの状態を表示し、ドリルダウンしてサービスの詳細を表示できます。また、サービスをアクティベートおよび非アクティベートすることもできます。

Server

読み取り専用モードのローカルまたはリモートホストに関する詳細情報。

Framework

コンテナ OSGi フレームワークの設定オプション。フレームワークの起動レベルと初期バンドルの起動レベルを設定できます。

Configuration

設定オブジェクトのリスト。各オブジェクトの状態を表示し、オブジェクトの詳細を表示または編集できます。また、新しい設定オブジェクトを作成することもできます。

3.12. 診断の表示

Diagnostics タブを使用して、JVM DiagnosticCommand および HotspotDiagnostic インターフェイスから JVM に関する診断情報を表示します。



注記

この機能は、Java Mission Control (jmc) の **Diagnostic Commands** ビューや、コマンドラインツールの jcmd と似ています。場合によっては、プラグインが対応する jcmd コマンドを提供します。

手順

1. ロードされたクラスのインスタンス数や、これらのインスタンスが使用するバイト数を取得するには、**Class Histogram** をクリックします。操作が繰り返し行われた場合、最後の操作実行との差異がタブに表示されます。
2. JVM 診断のフラグ設定を表示するには、**JVM flags** をクリックします。
3. 稼働中の JVM でもフラグ設定を変更できます。

関連情報

サポートされる JVM はプラットフォームによって異なります。詳細は以下を参照してください。

- <http://www.oracle.com/technetwork/java/vmoptions-jsp-140102.html>
- <http://openjdk.java.net/groups/hotspot/docs/RuntimeOverview.html>

3.13. スレッドの表示

スレッドの状態を表示および監視できます。

手順

1. **Runtime** タブをクリックし、**Threads** サブタブをクリックします。**Threads** ページには、アクティブなスレッドと各スレッドのスタックトレースの詳細が表示されます。デフォルトでは、スレッドリストにはすべてのスレッドが ID 値が大きい順に表示されます。
2. ID 値が小さい順に表示するには、**ID** 列ラベルをクリックします。
3. 任意で、スレッドの状態 (例: **Blocked**) やスレッド名でリストを絞り込むことができます。
4. ロッククラス名やスレッドのフルスタックトレースなど、特定スレッドの詳細情報を表示するには、**Actions** 列で **More** をクリックします。

3.14. ログエントリーの表示

Logs タブで Red Hat Fuse のログエントリーを表示できます。

前提条件

Logs タブは、Java アプリケーションに Log MBean が含まれる場合に利用できます。

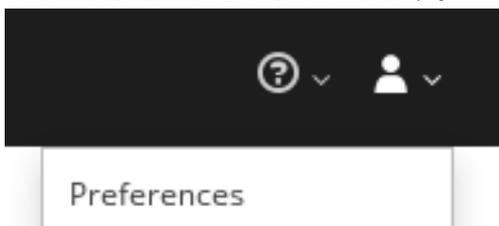
手順

1. ログエントリーのリストを表示するには、**Log Entries** タブをクリックします。デフォルトでは、リストのログエントリーは昇順で表示されます。

各ログエントリーをドリルダウンすると、ログエントリーに関する詳細情報が表示されます。

2. ログのリストを絞り込み、特定のログタイプを表示するには、**Action Bar** をクリックします。テキスト文字列またはログレベルを基にしてログエントリーセクションを絞り込むことができます。
3. Fuse Console のデフォルト設定を変更するには、以下を行います。

- a. Fuse Console の右上隅にあるユーザーアイコンをクリックして、ドロップダウンメニューの **Preferences** をクリックします。



- b. デフォルトのソート順序を変更するには、**Server Logs** を選択し、ログエントリーリンクをクリックして、バンドル名、スレッド、完全なメッセージテキストなどのログエントリーに関する詳細を表示します。
- c. 必要に応じて、ログメッセージの保存に関する次の設定をカスタマイズできます。
 - Fuse Console に保持するログステートメントの数 (デフォルトは 100)。
 - グローバルログレベル: **INFO** (デフォルト)、OFF、ERROR、WARN、および DEBUG。
 - **hawtio-oauth** や **hawtio-core-utils** など、含める子レベルのメッセージ。
- d. Fuse Console のログ設定をデフォルトの値に戻すには、**Reset** → **Reset settings** とクリックします。

3.15. PROMETHEUS メトリックの有効化

Prometheus は、スタンドアロン Apache Karaf コンテナにデプロイされたサービスの監視に使用できる、システムおよびサービスを対象としたオープンソースの監視および警告ツールキットです。Prometheus は、設定されたサービスから一定の間隔でメトリクスを収集および保存します。さらに、ルール式の評価や結果の表示を行い、指定の条件が true になるとアラートをトリガーできます。



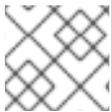
重要

Prometheus に対する Red Hat のサポートは、Red Hat 製品ドキュメントに記載されているセットアップと推奨設定に限定されます。

Prometheus は、クライアントにインストールおよび設定された "エクスポーター" を使用して、エンドポイントを Prometheus 形式で公開します。このエンドポイントは、メトリックのリストとメトリックの現在の値を提供する HTTP インターフェイスです。Prometheus は定期的にターゲット定義の各エンドポイントをスクレイピングし、収集したデータをそのデータベースに書き込みます。Prometheus は、現在実行中のセッションだけでなく、長期間にわたってデータを収集します。Prometheus は、データをグラフィカルに可視化してクエリーを実行できるようにデータを格納します。

3.15.1. スタンドアロン Apache Karaf コンテナからのメトリックのエクスポートを有効にする

Prometheus は、Camel によって公開されるメトリックが含まれる設定ファイル (<https://raw.githubusercontent.com/jboss-fuse/application-templates/master/prometheus/prometheus-config.yml>) を使用します。



注記

識別できるメトリックは、JMX で提供されるメトリックに限定されます。

Apache Camel メトリックを生成するには、Fuse アプリケーションをデプロイする必要があります。

手順

コマンドラインを使用して、スタンドアロン Apache Karaf コンテナから Prometheus メトリックのエクスポートを有効にするには、以下を実行します。

1. コマンドプロンプトを開き、現在の場所が Apache Karaf インストールの **etc/** ディレクトリであることを確認します。
2. 以下のコマンドを入力して、**etc/** ディレクトリのサンプルファイルから Prometheus 設定ファイルを作成します。

```
cp prometheus-config.yml-example prometheus-config.yml
```

3. エクスポーターは、**fuse** または **fuse.bat** コマンドを使用して Fuse を起動する場合のみ使用できます。Linux または Unix の場合は **bin/fuse**、Windows の場合は **bin/fuse.bat** を実行します。
4. Fuse の再起動後、<http://localhost:9779> で Web ブラウザーを開くと、公開されたメトリックを表示できます。



注記

必要に応じて、コマンドラインから **KARAF_PROMETHEUS_PORT** および **KARAF_PROMETHEUS_CONFIG** 設定変数のデフォルト値を変更できます。

3.15.2. Apache Karaf コンテナから公開済みメトリックをスクレイピングするように Prometheus サーバーを設定する

Prometheus サーバーが Apache Karaf コンテナからメトリックをスクレイピングできるようにするには、メトリックを公開するエンドポイントを Prometheus 設定ファイルの **targets** プロパティに追加する必要があります。

手順

1. Prometheus インストールディレクトリーの **/prometheus.yml** 設定ファイルに移動します。
2. スクレイピングする Apache Karaf エンドポイントを追加します。

```
scrape_configs:  
  - job_name: 'prometheus'  
  
    # metrics_path defaults to '/metrics'  
    # scheme defaults to 'http'.  
    static_configs:  
      - targets: ['localhost:9779']
```

第4章 EAP スタンドアロンでの RED HAT FUSE アプリケーションの監視および管理

4.1. FUSE CONSOLE

Red Hat Fuse Console は、Hawtio オープンソースソフトウェアをベースとする Web コンソールです。サポートされるブラウザのリストは [Red Hat Fuse でサポートされる構成](#) を参照してください。

Fuse Console は、デプロイされた1つ以上の Fuse コンテナの詳細を確認および管理するための中央インターフェイスを提供します。また、Red Hat Fuse およびシステムリソースの監視、更新の実行、およびサービスの起動と停止を行うこともできます。

Fuse Console は、Red Hat Fuse スタンドアロンをインストールするか、Fuse on OpenShift を使用する場合に利用できます。Fuse Console で表示および管理できるインテグレーションは、実行されているプラグインによって異なります。使用できるプラグインには以下が含まれます。

- Camel
- JMX
- OSGI
- Runtime
- Logs

4.2. FUSE CONSOLE へのアクセス

以下の手順に従って、Red Hat JBoss Enterprise Application Platform の Fuse Console にアクセスします。

前提条件

Fuse を JBoss EAP コンテナにインストールする必要があります。ステップごとの手順は、[Installing on JBoss EAP](#) を参照してください。

手順

スタンドアロン JBoss EAP ディストリビューションの Fuse Console にアクセスするには、以下を実行します。

1. Red Hat Fuse スタンドアロンを以下のコマンドで起動します。
Linux/Mac OS の場合: **./bin/standalone.sh**

Windows の場合: **./bin/standalone.bat**
2. Web ブラウザーで URL を入力し、Fuse Console に接続します。例:
<http://localhost:8080/hawtio>
3. ログインページでユーザー名とパスワードを入力し、**Log In** をクリックします。

デフォルトでは、Fuse Console に Home ページが表示されます。左側のナビゲーションタブには実行中のプラグインが表示されます。



注記

Fuse Console のメインページがブラウザーに表示されるまで時間がかかる場合、ログファイルの数とサイズを削減する必要がある場合があります。ログファイルの最大サイズ (rotate-size) に到達し、ファイル数を維持する (max-backup-index) 場合は、**periodic-size-rotating-file-handler** を使用してファイルのローテーションを行うことができます。このハンドラーの使用方法に関する詳細は、Red Hat JBoss Enterprise Application Platform の製品ドキュメントを参照してください。

4.3. FUSE CONSOLE ブランディングのカスタマイズ

Fuse Console ブランディングプラグインを使用すると、タイトル、ロゴ、ログインページの情報などの Fuse Console ブランディング情報をカスタマイズできます。

デフォルトでは、Fuse Console のブランディングは Fuse Console WAR ファイル (**eap-install-dir/standalone/deployments/hawtio-wildfly-<version>.war**) の **hawtconfig.json** で定義されます。Fuse Console ブランディングプラグインを実装すると、デフォルトのブランディングを独自のカスタムブランディングでオーバーライドできます。

手順

1. ブランディングプラグインの例を <https://github.com/hawtio/hawtio/tree/master/examples/branding-plugin> から任意のローカルディレクトリーにダウンロードします。
2. 任意のエディターで、Fuse Console ブランディングプラグインの **src/main/webapp/plugin/brandingPlugin.js** ファイルを開き、Fuse Console ブランディングをカスタマイズします。
表A.1「Fuse Console 設定プロパティー」に記載されている設定プロパティーの値を変更できます。
3. 変更を保存します。
4. 任意のエディターで、Fuse Console ブランディングプラグインの **pom.xml** ファイルを開き、**<parent>** セクションに移動します。

```
<parent>
  <groupId>io.hawt</groupId>
  <artifactId>project</artifactId>
  <version>2.9-SNAPSHOT</version>
  <relativePath>../..</relativePath>
</parent>
```

5. 以下のように **<parent>** セクションを編集します。
 - a. **<version>** プロパティーの値を Fuse on EAP インストールのバージョンに一致するように変更します。たとえば、Fuse on EAP インストールディレクトリー名が **2.0.0.fuse-760015** の場合は、バージョンを **2.0.0.fuse-760015** に設定します。
 - b. **<relativePath>../..</relativePath>** 行を削除します。
以下に例を示します。

```
<parent>
  <groupId>io.hawt</groupId>
  <artifactId>project</artifactId>
```

```
<version> 2.0.0.fuse-760015</version>
</parent>
```

- ターミナルウィンドウで、以下のコマンドを実行し、branding-plugin プロジェクトをビルドします。

```
mvn clean install
```

このコマンドによって、プロジェクトの **/target** フォルダに **branding-plugin.war** ファイルが作成されます。

- branding-plugin.war** ファイルを EAP インストールの **standalone/deployments** ディレクトリにコピーします。
- Fuse が稼働していない場合は、以下のコマンドを実行して起動します。
Linux/Mac OS の場合: **./bin/standalone.sh**

Windows の場合: **./bin/standalone.bat**
- Web ブラウザーで、8. の起動コマンドによって返された URL を使用して、Fuse Console を開きます (デフォルトの URL は <http://localhost:8080/hawtio/> です)。



注記

Web ブラウザーで Fuse Console をすでに実行した場合、ブランディングはブラウザーのローカルストレージに保存されます。新しいブランディング設定を使用するには、ブラウザーのローカルストレージをクリアする必要があります。

4.4. FUSE CONSOLE のセキュア化

EAP で Fuse Console をセキュアにするには、以下を行います。

- AWS へのデプロイ時に Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効化**
スタンドアロン Fuse アプリケーションを Amazon Web Services (AWS) にデプロイする場合、**hawtio.disableProxy** システムプロパティを **true** に設定して、Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効にする必要があります。



注記

Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効にすると、Fuse Console の **Connect** タブが無効になり、Fuse Console から他の JVM に接続できなくなります。AWS に複数の Fuse アプリケーションをデプロイする場合は、アプリケーションごとに Fuse Console をデプロイする必要があります。

- HTTPS を必須プロトコルとして設定する**
hawtio.http.strictTransportSecurity プロパティを使用すると、Web ブラウザーでセキュアな HTTPS プロトコルを使用して Fuse Console にアクセスするよう要求できます。このプロパティにより、HTTP を使用して Fuse Console へのアクセスを試みる Web ブラウザーで、HTTPS を使用するようにリクエストを自動的に変換することが必須になります。
- 公開鍵を使用して応答をセキュアにする**
hawtio.http.publicKeyPins プロパティを使用すると、特定の暗号化の公開鍵を Fuse Console に関連付けるように Web ブラウザーに指示し、偽造証明書による "中間者攻撃" のリスクを軽減することで、HTTPS プロトコルをセキュアにできます。

手順

1. `$EAP_HOME/standalone/configuration/standalone*.xml` ファイルの `system-properties` セクションにある `hawtio.http.strictTransportSecurity` および `hawtio.http.publicKeyPins` プロパティを、以下の例のように設定します。

```
<property name="hawtio.http.strictTransportSecurity" value="max-age=31536000;
includeSubDomains; preload"/>
<property name="hawtio.http.publicKeyPins" value="pin-
sha256=cUPcTAZWKaASuYWhhneDttWpY3oBAkE3h2+soZS7sWs"; max-age=5184000;
includeSubDomains"/>
```

2. (AWS のみにデプロイする場合) Fuse Console のプロキシサーバーレットを無効にするには、`$EAP_HOME/standalone/configuration/standalone*.xml` ファイルの `system-properties` セクションにある `hawtio.disableProxy` プロパティを以下の例のように設定します。

```
<property name="hawtio.disableProxy" value="true"/>
```

関連情報

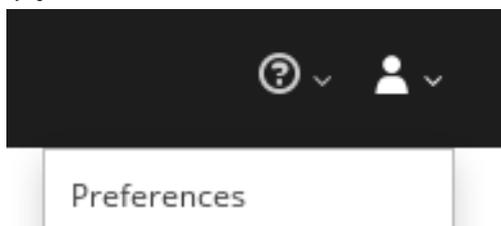
- `hawtio.http.strictTransportSecurity` プロパティの構文の説明は、[HTTP Strict Transport Security \(HSTS\) 応答ヘッダーの説明ページ](#)を参照してください。
- `hawtio.http.publicKeyPins` プロパティの構文や、Base64 でエンコードされた公開鍵の抽出方法の説明は、[HTTP Public Key Pinning 応答ヘッダーの説明ページ](#)を参照してください。

4.5. FUSE CONSOLE でデータが正しく表示されるよう確認

Fuse Console のキューおよび接続の表示で、不足しているキューや接続があったり、一貫性のないアイコンが表示される場合は、Jolokia コレクションサイズパラメーターを調節します。このパラメーターは、Jolokia が応答でマーシャルするアレイの最大要素数を指定するものです。

手順

1. Fuse Console の右上隅にあるユーザーアイコンをクリックして、**Preferences** をクリックします。



2. **Maximum collection size** オプションの値を大きくします (デフォルトは 50,000)。
3. **Close** をクリックします。

4.6. FUSE CONSOLE の無効化

JBoss EAP で Fuse Console を無効にすると、他のコンポーネントに影響を与えずにすべてのユーザーをアクセス不可能にすることができます。

手順

JBoss EAP の Fuse Console を無効にするには、以下のいずれかを実行します。

- Fuse Console デプロイメントファイル **\$EAP_HOME/standalone/deployments/hawtio-wildfly-xxxxx.war** を削除します。
- JBoss EAP 管理コンソールまたはコマンドラインインターフェイスを使用して Fuse Console をアンデプロイします。

4.7. リモート FUSE アプリケーションへの接続

Fuse Console は Jolokia を使用します。Jolokia は Java Management Extensions (JMX) へのエージェントベースのアプローチであり、クライアントへの追加ソフトウェア (エージェント) のインストールを必要とします。Red Hat Fuse には jolokia エージェントがデフォルトで含まれています。

スタンドアロン Fuse Console ディストリビューションでは、内部ですでに jolokia エージェント (<https://jolokia.org/>) が実行されているリモートインテグレーションに接続できます。接続するプロセス内に jolokia エージェントがない場合は、jolokia のドキュメント (<http://jolokia.org/agent.html>) を参照してください。

4.7.1. Fuse Console のアンロック

デフォルトでは、JBoss EAP 上の Fuse 7 スタンドアロンの Jolokia はロックされ、Fuse Console はリモートでアクセスできません。

localhost または **127.0.0.1** 以外のホスト名または IP アドレスに対して Fuse Console のロックを解除するには、次の手順に従います。

1. エディターで **\$EAP_HOME/standalone/configuration/jolokia-access.xml** ファイルを開きます。
2. Fuse Console でアクセスする Fuse インテグレーションのホスト名または IP アドレスを登録するため、**<cors>** セクションにホスト名または IP アドレスを追加します。
たとえば、Fuse Console からホスト名 **0.0.0.3** にアクセスするために追加する行は次のとおりです。

```
*<allow-origin>http://0.0.0.3:*</allow-origin>*
```

この行を次のように追加します。

```
<!--
Cross-Origin Resource Sharing (CORS) restrictions

By default, only CORS access within localhost is allowed for maximum security.

You can add trusted hostnames in the <cors> section to unlock CORS access from them.

-->

<cors>

<!-- Allow cross origin access only within localhost -->

<allow-origin>http*://localhost:*</allow-origin>
```

```

<allow-origin>http*://127.0.0.1:*</allow-origin>

<allow-origin>http://0.0.0.3:*</allow-origin>

<!-- Whitelist the hostname patterns as <allow-origin> -->

<!--

<allow-origin>http*://*.example.com</allow-origin>

<allow-origin>http*://*.example.com:*</allow-origin>

-->

<!-- Check for the proper origin on the server side to protect against CSRF -->

<strict-checking />

</cors>

```

3. ファイルを保存します。

4.7.2. リモートアクセスの制限

必要に応じて、特定のホストおよび IP アドレスの Fuse Console へのリモートアクセスを制限できます。

HTTP クライアントの IP アドレスを基にして全体的なアクセス権限を割り当てることができます。これらの制限を指定するには、以下を行います。

jolokia-access.xml ファイルで、**<host>** 要素が1つ以上含まれる **<remote>** セクションを追加または編集します。**<host>** 要素に対して IP アドレス、ホスト名、または CIDR 形式のネットマスク (例: 10.0 ネットワークからのすべてのクライアントは **10.0.0.0/16**) を指定できます。

以下の例は、ローカルホストと IP アドレスが **10.0** で始まるすべてのクライアントからのアクセスを許可します。他の IP アドレスの場合はアクセスが拒否されます。

```

<remote>
  <host>localhost</host>
  <host>10.0.0.0/16</host>
</remote>

```

詳細は Jolokia のセキュリティーに関するドキュメント (<https://jolokia.org/reference/html/security.html>) を参照してください。

4.7.3. リモート Fuse インスタンスへの接続の許可

Fuse Console のプロキシサーバーレットはホワイトリストを使用してホストを保護し、Fuse Console はデフォルトではローカルホストのみに接続できます。Fuse Console を他のリモート Fuse インスタンスに接続する場合は、**standalone/configuration/standalone-*.xml** ファイルで以下の設定変更を行います。

```

<property name=hawtio.proxyWhitelist" value="localhost, 127.0.0.1, myhost1, myhost2, myhost3"/>

```

4.7.4. リモート Jolokia エージェントへの接続

作業を開始する前に、リモート Jolokia エージェントの接続詳細 (ホスト名、ポート、およびパス) を知っておく必要があります。

Red Hat JBoss EAP における Jolokia エージェントのデフォルトの接続 URL は <http://<host>:8080/hawtio/jolokia> です。

システム管理者はこのデフォルト設定を変更できます。

通常、Jolokia エージェントにリモートで接続する URL は、Fuse Console を開く URL に `/jolokia` を追加したものです。たとえば、Fuse Console を開く URL が <http://<host>:1234/hawtio> の場合、リモート接続の URL は <http://<host>:1234/hawtio/jolokia> になります。

JVM を確認するためにリモート Jolokia インスタンスに接続するには、以下を行います。

1. **Connect** タブをクリックします。
2. **Remote** タブをクリックし、**Add connection** をクリックします。
3. **Name**、**Scheme** (HTTP または HTTPS)、および **hostname** を入力します。
4. **Test Connection** をクリックします。
5. **Add** をクリックします。



注記

Fuse Console は自動的にローカルホストと 127.0.0.1 以外のローカルネットワークインターフェイスをプローブし、ホワイトリストに追加します。そのため、ローカルマシンのアドレスを手作業でホワイトリストに登録する必要はありません。

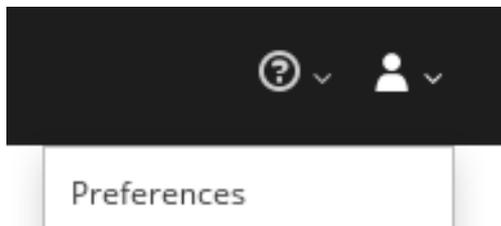
4.7.5. データ移動設定の指定

Fuse Console に表示されるデータをより頻繁にリフレッシュする場合などに、以下の Jolokia 設定を変更できます。データの更新を頻繁に行うと、ネットワークトラフィックに影響し、サーバーに対するリクエストの数が増加するため注意してください。

- **Update rate** - JMX データを取得するため Jolokia へポーリングを行う間隔 (デフォルトは 5 秒)。
- **Maximum depth** - オブジェクトを返す前に、Jolokia がサーバー側でオブジェクトを JSON にマーシャルする際のレベル数 (デフォルトは 7)。
- **Maximum collection size** - 応答で Jolokia がマーシャルするアレイの最大要素数 (デフォルトは 50,000)。

これらの設定の値を変更するには、以下を行います。

1. Fuse Console の右上にあるユーザーアイコンをクリックして、**Preferences** をクリックします。



2. オプションを編集して **Close** をクリックします。

4.7.6. JVM ランタイム情報の表示

システムプロパティ、メトリック、スレッドなどの JVM のランタイム情報を表示するには、**Runtime** タブをクリックします。

4.8. APACHE CAMEL アプリケーションの表示および管理

Fuse Console の **Camel** タブで Apache Camel のコンテキスト、ルート、および依存関係を表示および管理します。

次の詳細を表示できます。

- 実行中の Camel コンテキストすべてのリスト。
- Camel バージョン番号やランタイム統計など、各 Camel コンテキストの詳細情報。
- 各 Camel アプリケーションの全ルートおよびランタイム統計のリスト。
- 実行中のルートとリアルタイムのメトリクスのグラフィカル表示。

また、以下を行うと Camel アプリケーションと対話もできます。

- コンテキストの起動および一時停止。
- 再起動、停止、一時停止、再開などを実行できるように、すべての Camel アプリケーションとそれらのルートのライフサイクルを管理すること。
- 実行中のルートのライブトレースおよびデバッグ。
- Camel エンドポイントへのメッセージの閲覧および送信。

前提条件

Camel タブは、1つ以上の Camel ルートを使用するコンテナに接続する場合のみ使用できます。

4.8.1. コンテキストの起動、一時停止、または削除

1. **Camel** タブのツリービューで、**Camel Contexts** をクリックします。
2. リストのコンテキストの横にあるボックスにチェックマークを入れます。
3. **Start** または **Suspend** をクリックします。
4. コンテキストを削除するには以下を行います。
 - a. コンテキストを停止します。

- b. 楕円のアイコンをクリックし、ドロップダウンメニューで **Delete** を選択します。



注記

コンテキストを削除する場合、デプロイされたアプリケーションから削除します。

4.8.2. Camel アプリケーションの詳細表示

1. Camel タブのツリービューで、Camel アプリケーションをクリックします。
2. アプリケーションの属性と値のリストを表示するには、**Attributes** をクリックします。
3. アプリケーション属性をグラフィカルに表示するには、**Chart** をクリックした後、**Edit** をクリックし、チャートに表示する属性を選択します。
4. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
5. アプリケーションエンドポイントを表示するには、**Endpoints** をクリックします。リストは **URL**、**Route ID**、および **direction** で絞り込むことができます。
6. メッセージ本文とメッセージヘッダーを別のタイプに変換するために使用される Camel 組み込みタイプ変換メカニズムに関連する統計を表示、有効化、および無効化するには、**Type Converters** をクリックします。
7. JMX 操作 (XML からのルート追加または更新、クラスパスで利用できる Camel コンポーネントの検索など) を表示および実行するには、**Operations** をクリックします。

4.8.3. Camel ルートリストの表示および Camel ルートとの対話

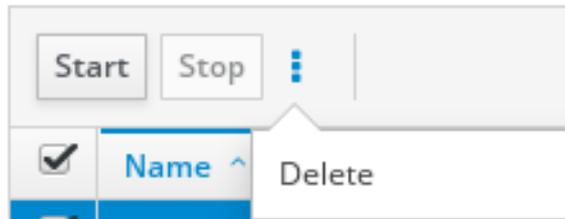
1. ルートのリストを表示するには、以下を行います。
 - a. Camel タブをクリックします。
 - b. ツリービューでアプリケーションの routes フォルダをクリックします。

Routes

<input type="button" value="Start"/> <input type="button" value="Stop"/> ⋮		
<input type="checkbox"/>	Name ^	State
<input type="checkbox"/>	_route1	Started
<input type="checkbox"/>	_route2	Started

2. 1つまたは複数のルートを起動、停止、または削除するには、以下を行います。
 - a. リストのルートの横にあるボックスにチェックマークを入れます。
 - b. **Start** または **Stop** をクリックします。
 - c. 最初にルートを停止してから削除する必要があります。停止したら楕円のアイコンをクリックし、ドロップダウンメニューで **Delete** を選択します。

Routes



注記

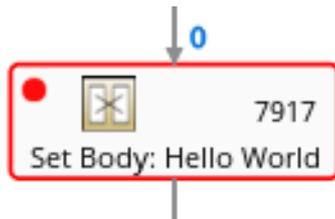
- ルートを削除する場合、デプロイされたアプリケーションから削除します。
- ツリービューで特定のルートを選択し、右上のメニューをクリックして起動、停止、または削除することもできます。

3. ルートのグラフィカルな図を表示するには、**Route Diagram** をクリックします。
4. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
5. エンドポイントを表示するには、**Endpoints** をクリックします。URL、Route ID、および方向でリストを絞り込むことができます。
6. **Type Converters** をクリックし、Camel の組み込みタイプ変換メカニズムに関連する統計を表示、有効化、および無効化します。このメカニズムはメッセージ本文とメッセージヘッダーを別のタイプに変換するために使用されます。
7. 特定のルートと対話するには、以下を行います。
 - a. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
 - b. ルート属性と値のリストを表示するには、**Attributes** をクリックします。
 - c. ルート属性をグラフィカルに表示するには、**Chart** をクリックします。**Edit** をクリックすると、チャートに表示する属性を選択できます。
 - d. inflight exchange および blocked exchange を表示するには、**Exchanges** をクリックします。
 - e. **Operations** をクリックして JMX 操作 (ルートを XML としてダンプ、ルートの Camel ID 値の取得など) を表示および実行できます。
8. ルートを介してメッセージをトレースするには、以下を実行します。
 - a. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
 - b. **Trace** を選択し、**Start tracing** をクリックします。
9. メッセージをルートに送信するには、以下を行います。
 - a. **Camel** タブのツリービューでコンテキストのエンドポイントフォルダーを開き、エンドポイントを選択します。
 - b. **Send** サブタブをクリックします。

- c. JSON または XML 形式のメッセージを設定します。
- d. **Send** をクリックします。
- e. ルートの **Trace** タブに戻り、ルートを紹介したメッセージのフローを確認します。

4.8.4. ルートのデバッグ

1. **Camel** タブのツリービューで、ルートを選択します。
2. **Debug** を選択し、**Start debugging** をクリックします。
3. ブレークポイントを追加するには、図のノードを選択し、**Add breakpoint** をクリックします。ノードに赤い点が表示されます。



ノードがブレークポイントのリストに追加されます。

Breakpoints	
setBody1	×
log1	×

4. 下矢印をクリックして次のノードに移動するか、**Play** ボタンをクリックしてルートの実行を再開します。
5. **Pause** ボタンをクリックして、ルートのすべてのスレッドを一時停止します。
6. 終了したら **Stop debugging** をクリックします。すべてのブレークポイントが消去されます。

4.9. JMX ドメインおよび MBEAN の表示および管理

JMX (Java Management Extensions) は、実行時にリソース (サービス、デバイス、およびアプリケーション) を動的に管理できる Java 技術です。リソースは MBean (Managed Bean) と呼ばれるオブジェクトで表現されます。リソースは、作成、実装、またはインストール後、すぐに管理および監視できます。

Fuse Console で JMX プラグインを使用すると、JMX ドメインと MBean を表示および管理できます。MBean 属性の表示、コマンドの実行、および MBean の統計を示すチャートの作成を行うことができます。

JMX タブは、フォルダーに整理されたアクティブな JMX ドメインと MBean のツリービューを提供します。詳細を確認し、MBean でコマンドを実行できます。

手順

1. MBean 属性を表示および編集するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで MBean を選択します。

- b. **Attributes** タブをクリックします。
 - c. 属性をクリックしてその詳細を表示します。
 2. 操作を実行するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで MBean を選択します。
 - b. **Operations** タブをクリックし、リストにある操作の1つをデプロイメントします。
 - c. **Execute** をクリックし、操作を実行します。
 3. チャートを表示するには、以下を行います。
 - a. ツリービューで項目を選択します。
 - b. **Chart** タブをクリックします。

4.10. 診断の表示

Diagnostics タブを使用して、JVM DiagnosticCommand および HotspotDiagnostic インターフェイスから JVM に関する診断情報を表示します。



注記

この機能は、Java Mission Control (jmc) の **Diagnostic Commands** ビューや、コマンドラインツールの jcmd と似ています。場合によっては、プラグインが対応する jcmd コマンドを提供します。

手順

1. ロードされたクラスのインスタンス数や、これらのインスタンスが使用するバイト数を取得するには、**Class Histogram** をクリックします。操作が繰り返し行われた場合、最後の操作実行との差異がタブに表示されます。
2. JVM 診断のフラグ設定を表示するには、**JVM flags** をクリックします。
3. 稼働中の JVM でもフラグ設定を変更できます。

関連情報

サポートされる JVM はプラットフォームによって異なります。詳細は以下を参照してください。

- <http://www.oracle.com/technetwork/java/vmoptions-jsp-140102.html>
- <http://openjdk.java.net/groups/hotspot/docs/RuntimeOverview.html>

4.11. スレッドの表示

スレッドの状態を表示および監視できます。

手順

1. **Runtime** タブをクリックし、**Threads** サブタブをクリックします。**Threads** ページには、アクティブなスレッドと各スレッドのスタックトレースの詳細が表示されます。デフォルトでは、スレッドリストにはすべてのスレッドが ID 値が大きい順に表示されます。

2. ID 値が小さい順に表示するには、ID 列ラベルをクリックします。
3. 任意で、スレッドの状態 (例: **Blocked**) やスレッド名でリストを絞り込むことができます。
4. ロッククラス名やスレッドのフルスタックトレースなど、特定スレッドの詳細情報を表示するには、**Actions** 列で **More** をクリックします。

4.12. ログエントリーの表示

Logs タブで Red Hat Fuse のログエントリーを表示できます。

前提条件

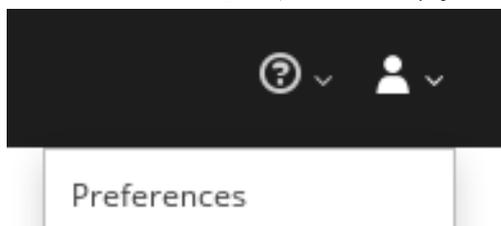
Logs タブは、Java アプリケーションに Log MBean が含まれる場合に利用できます。

手順

1. ログエントリーのリストを表示するには、**Log Entries** タブをクリックします。デフォルトでは、リストのログエントリーは昇順で表示されます。

各ログエントリーをドリルダウンすると、ログエントリーに関する詳細情報が表示されます。

2. ログのリストを絞り込み、特定のログタイプを表示するには、**Action Bar** をクリックします。テキスト文字列またはログレベルを基にしてログエントリーセクションを絞り込むことができます。
3. Fuse Console のデフォルト設定を変更するには、以下を行います。
 - a. Fuse Console の右上隅にあるユーザーアイコンをクリックして、ドロップダウンメニューの **Preferences** をクリックします。



- b. デフォルトのソート順序を変更するには、**Server Logs** を選択し、ログエントリーリンクをクリックして、バンドル名、スレッド、完全なメッセージテキストなどのログエントリーに関する詳細を表示します。
- c. 必要に応じて、ログメッセージの保存に関する次の設定をカスタマイズできます。
 - Fuse Console に保持するログステートメントの数 (デフォルトは 100)。
 - グローバルログレベル: **INFO** (デフォルト)、OFF、ERROR、WARN、および DEBUG。
 - **hawtio-oauth** や **hawtio-core-utils** など、含める子レベルのメッセージ。
- d. Fuse Console のログ設定をデフォルトの値に戻すには、**Reset** → **Reset settings** とクリックします。

付録A FUSE CONSOLE 設定プロパティ

デフォルトでは、Fuse Console 設定は **hawtconfig.json** ファイルで定義されます。タイトル、ロゴ、ログインページの情報などの Fuse Console 設定情報をカスタマイズできます。

表A.1「Fuse Console 設定プロパティ」には、プロパティの説明と、各プロパティに値が必要かどうかを示されています。

表A.1 Fuse Console 設定プロパティ

セクション	プロパティ名	デフォルト値	説明	必須/オプション
about	Title	Red Hat Fuse Management Console	Fuse Console の About ページに表示されるタイトル。	必須
	productInfo	空の値	Fuse Console の About ページに表示される製品情報。	オプション
	additionalInfo	空の値	Fuse Console の About ページに表示される追加情報。	オプション
	copyright	空の値	Fuse Console の About ページに表示される著作権情報。	オプション
	imgSrc	img/Logo-RedHat-A-Reverse- RGB.png	Fuse Console の About ページに表示されるイメージ。	必須
branding	appName	Red Hat Fuse Management Console	アプリケーションの名前。この名前は Fuse Console のタイトルバーに表示されます。	必須

セクション	プロパティ名	デフォルト値	説明	必須/オプション
	appLogoUrl	img/Logo-Red_Hat-Fuse-A-Reverse- RGB.png	Fuse Console のナビゲーションバーに表示されるアプリケーションのロゴイメージファイルへのパス。 Hawtio ステータス URL への相対パス、または絶対 URL を値として指定可能です。	必須
	Css		アプリケーションのスタイルに使用できる外部 CSS スタイルシートの URL。Hawtio ステータス URL への相対パス、または絶対 URL を指定可能です。	オプション
	companyLogoUrl	img/Logo-RedHat-A-Reverse- RGB.png	会社のロゴイメージファイルへのパス。	必須
	Favicon		通常、Web ブラウザータブに表示される favicon の URL。Hawtio ステータス URL への相対パス、または絶対 URL を指定可能です。	オプション
login	description	空の値	Fuse Console の Login ページに表示される説明テキスト (例: http://localhost:8181/hawtio)。	オプション

セクション	プロパティ名	デフォルト値	説明	必須/オプション
	links	[]	"url"と"text"のペアの配列を指定し、ユーザーが詳細またはヘルプを取得できるページへの追加リンクを提供します。	オプション
disabledRoutes	なし	[]	コンソールの特定のパス(プラグインなど)を無効にします。このセクションは変更しないでください。変更は、OpenShift以外のディストリビューションではサポートされません。	オプション